

史跡上野国分寺跡

第2期追加調査報告書

2021

群馬県

史跡上野国分寺跡

第2期追加調査報告書

2021

群馬県

序

上野国分寺は、聖武天皇の国分寺創建の詔により、国家鎮護のために当時の国ごとに建立された寺院の一つです。その跡地である史跡上野国分寺跡は、大正15年10月に国史跡に指定された本県を代表する奈良時代の遺跡です。詔では、「七重塔を持つ国分寺は「国の華」であり、必ず良い場所を選んで長く久しく保つように」と述べられていました。史跡からは榛名山や赤城山の山並みを良好に眺めることができ、創建から1250年以上たった今でも、詔に述べられた「良い場所」としての景観が残されています。また、後世の開発によって壊されることなく、伽藍地全域がほぼ完全な形で残っていることから、全国的に見ても貴重な国分寺遺跡であるといえます。

群馬県では、史跡上野国分寺跡を適切に保存・活用するため、昭和48年度から史跡指定地の公有地化を進めてきました。昭和55～63年度にかけて発掘調査(第1期)を実施し、平成2～5年度に塔・金堂(現講堂)基壇、南辺築垣の一部を復元するとともにガイダンス施設を建設して、その価値を県内外に広く発信してきました。

また、平成24～28年度にかけて発掘調査(第2期)を実施しました。第2期調査では、これまで不明であった中門・回廊の位置がはじめて確認されたほか、本来の金堂跡の発見により、100年近くにわたって金堂とされてきた建物跡が講堂のものであったことが判明するなど、上野国分寺の姿を大きく塗り替えることとなりました。第2期調査成果は平成30年に『史跡上野国分寺跡第2期発掘調査報告書—総括編—』としてまとめ、広く公表いたしました。

その後、南大門や築垣の姿をより正確に捉えることなどを目的として、平成30～令和元年度にかけて追加調査を実施し、その成果をまとめたのが本書です。本書によって史跡上野国分寺跡の学術的価値がさらに高まり、広く世に知られるとともに、多くの方々にご利用していただければ幸いです。

最後に、本書の作成にあたり多大な御支援と御協力を賜りました、文化庁をはじめ史跡上野国分寺跡整備検討委員会・整備推進委員会の諸先生方、地域住民の皆様、関係者の皆様により感謝の意を表し、序文といたします。

令和3年1月

群馬県知事 山本 一太

例 言

- 1 本書は、史跡上野国分寺跡の整備事業に伴い、平成 30、令和元年度に実施した第 2 期追加調査の発掘調査報告書である。
- 2 本事業は、文化庁の国庫補助金を受けて実施した。
- 3 発掘調査は、史跡上野国分寺跡整備検討委員会の指導の下、群馬県教育委員会文化財保護課が直営で実施した。各年度の調査期間、担当者等は次のとおりである。

平成 30 年度

発掘調査 平成 30 年 5 月 6 日～平成 30 年 6 月 30 日

調査担当者 橋本 淳(文化財保護課指導主事)

事務局 古澤勝幸(文化財保護課長)、青木道則(文化財保護課次長)、桜井美枝(補佐(埋蔵文化財係長))、齊藤英敏(文化財活用係長)、堀込真紀子(主幹)

令和元年度

発掘調査 令和元年 5 月 8 日～令和元年 9 月 25 日

調査担当者 橋本 淳

事務局 柴野敦雄(文化財保護課長)、福田一也(文化財保護課次長)、桜井美枝(文化財専門官)、齊藤英敏(補佐(文化財活用係長))、飯森康広(埋蔵文化財係長)、堀込真紀子(主幹)

- 4 資料整理の期間、担当者等は次のとおりである。

平成 30 年度

資料整理 平成 30 年 7 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日

整理担当者 橋本 淳

令和元年度

資料整理 令和元年 9 月 26 日～令和 2 年 3 月 31 日

整理担当者 橋本 淳

- 5 本書の編集・執筆担当者は次のとおりである。

編集 橋本 淳

執筆 遺物観察表(瓦) 高井佳弘(国土館大学非常勤講師)

遺物観察表(中世の土器) 黒澤照弘(群馬県文化財保護課)

遺物観察表(鉄製品) 杉山秀宏(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)







上記以外 橋本 淳

- 6 平成 30 年 3 月に『史跡上野国分寺跡第 2 期発掘調査報告書—総括編—』を刊行したが、今回の追加調査・検討により見解が変わったものがある。既往の報告と見解が異なるものについては、すべて本書の記述が優先する。
- 7 発掘調査および本書の作成にあたり、以下の機関、諸氏から御指導、御支援をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。(個人は五十音順・敬称略)

前橋市教育委員会 高崎市教育委員会 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

坂垣詩乃 大橋泰夫 神谷佳明 齊田智彦 桜岡正信 杉山秀宏

凡 例

- 1 史跡上野国分寺跡の整備事業に伴い、昭和55～63年度に実施した発掘調査を第1期調査、平成24年度以降に実施した発掘調査を第2期調査と呼ぶ。なお、第2期調査については平成24～28年度調査の成果を『史跡上野国分寺跡第2期発掘調査報告書—総括編—』としてまとめたため、平成30、令和元年度に実施した発掘調査を第2期追加調査と呼ぶ。
- 2 調査グリッドは、第1期の調査区と方位を合わせるため、第1期調査の方法を踏襲して設定した。旧日本測地系第IV座標系 $X = 43750$ 、 $Y = -72500$ を基準点とし、座標北より 4° 西偏させている。なお、基準点は世界測地系(測地成果2011)では、 $X = 44104.843$ 、 $Y = -72791.281$ である。
- 3 本書では、国分寺の主要伽藍を配置し、築垣で囲まれた区画を「伽藍地」と呼称している。
- 4 第1期調査において「ローム」と記載された土層については、本書では総社砂層(VII層)に改めている。本文中でも、第1期調査成果を引用する際に「ローム」を「黄褐色土」と読み換えている。
- 5 遺構図の縮尺は原則として1/50、1/100としたが、状況により1/40、1/80で掲載した。遺物図は鉄製品を2/3とした以外は1/3とし、遺物写真は遺物図と同縮尺とした。なお、土器類の実測図で中心線の脇、内面側に空白があるものは、口縁部ないし底部の残存が半分に満たない個体で、径を推定復元したことを示している。観察表の法量も()付きとした。
- 6 図中で使用したトーン、線種は次のとおりである。
断面図 As-B 混土層  土器実測図 油煙  緑釉 
瓦・土器  石  サブトレンチ 
- 7 本文中、略称で記載したテフラは以下のとおりである。
As-C 浅間Cテフラ(3世紀末) As-B 浅間Bテフラ(1108年)
Hr-FA 榛名二ツ岳渋川テフラ(6世紀初頭)
- 8 本書で使用した地図は以下のとおりである。
国土地理院発行1/200,000地勢図「長野」「宇都宮」、前橋市発行1/10,000地形図、高崎市発行1/10,000都市計画基本図

目次

I 調査に至る経緯	1	3 伽藍地東辺部	34
II 発掘調査の方法と経過		(1) 41-2, 3トレンチ	34
1 調査組織	4	(2) 42-3, 4トレンチ	38
2 発掘調査の目的と調査区	4	(3) 42-5トレンチ	40
3 発掘調査の方法	5	4 伽藍地西辺部	42
4 基本土層	7	(1) 42-1, 2トレンチ	42
5 発掘調査の経過	8	5 遺物観察表	44
III 発掘調査の成果		IV まとめ	
1 伽藍地南辺東部	11	1 上野国分寺の旧地形について	47
(1) 42-6トレンチ	11	2 南大門の構造について	50
(2) 42-7トレンチ	22	3 南辺東部の築垣について	53
2 伽藍地南辺西部	28	4 伽藍地区画施設について	56
(1) 41-1トレンチ	28	写真図版	
(2) 42-9トレンチ	29	抄録	
(3) 42-10トレンチ	29		

挿図目次

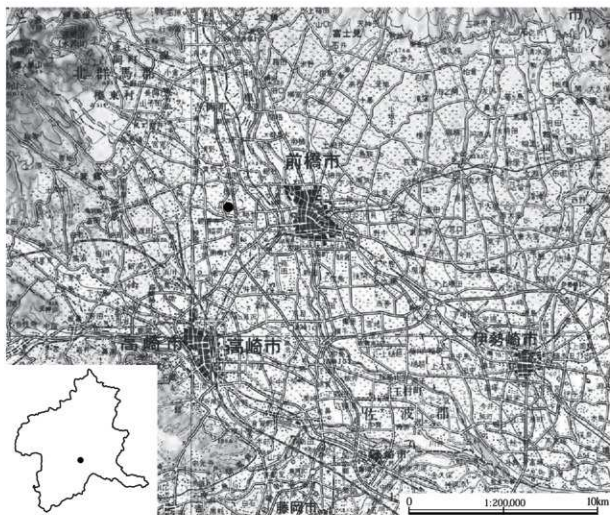
第1図 史跡の位置	1	第22図 南辺西部トレンチ平面図	31
第2図 史跡周辺の地形	2	第23図 SD29 出土遺物	31
第3図 史跡現況図	3	第24図 第1期 27次調査区平面・断面図	32
第4図 年度別調査区配置図	6	第25図 42-10トレンチ出土遺物	33
第5図 基本土層模式図	7	第26図 東大門地区平面・断面図	35
第6図 遺構全体図	9	第27図 41-2トレンチ平面・断面図	37
第7図 第1期 23次東調査区平面・断面図	12	第28図 41-2, 3トレンチ出土遺物	38
第8図 42-6トレンチ平面・断面図	13	第29図 42-3, 4トレンチ平面・断面図	39
第9図 南辺東部平面・断面図	15	第30図 42-3, 4トレンチ出土遺物	40
第10図 SDO1 出土遺物	17	第31図 42-5トレンチ平面・断面図、出土遺物	41
第11図 SK139 出土遺物(1)	18	第32図 42-1, 2トレンチ平面・断面図	43
第12図 SK139 出土遺物(2)	19	第33図 40-8トレンチ平面・断面図	47
第13図 SK140・42-6トレンチ出土遺物(1)	20	第34図 『総括報告書』における創建時の旧地形復元図	48
第14図 42-6トレンチ出土遺物(2)	21	第35図 追加調査成果に基づく創建時の旧地形復元図	49
第15図 42-7トレンチ平面・断面図	23	第36図 谷地部における築垣の状況	50
第16図 南辺東端部平面・断面図	24	第37図 南大門地区平面・断面図	51
第17図 42-7トレンチ出土遺物(1)	25	第38図 南辺築垣断面図(1)	54
第18図 42-7トレンチ出土遺物(2)	26	第39図 南辺築垣断面図(2)	55
第19図 SD12 出土遺物	27	第40図 築垣構造図	55
第20図 41-1トレンチ平面・断面図	28	第41図 南辺部全体図	57
第21図 42-9, 10トレンチ平面・断面図	30		

写真図版目次

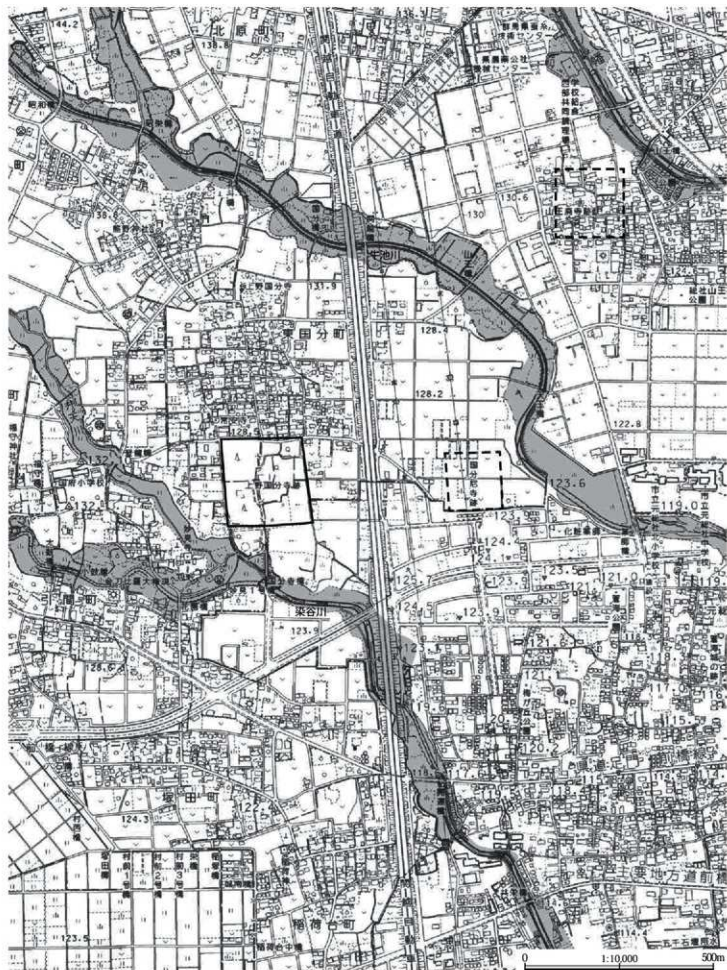
- | | | | |
|------|------------------------------------|------------------------------------|----------------------------------|
| PL 1 | 1. 史跡上野国分寺跡全景(上空から) | PL12 | 1. 42-10 トレンチ SD29 (深) 検出状況(西から) |
| PL 2 | 1. 42-6 トレンチ全景(北から) | 2. 42-10 トレンチ SD29 と復元南辺築垣(西から) | |
| | 2. 42-6 トレンチ全景(南から) | 3. 41-2 中トレンチ SD31 検出状況(南から) | |
| PL 3 | 1. 42-6 トレンチ築垣全景(西から) | 4. 41-2 南トレンチ SD31、SK138 検出状況(南から) | |
| | 2. 42-6 トレンチ東壁築垣断割り断面(西から) | 5. 41-2 トレンチ SD31 全景(南から) | |
| PL 4 | 1. 42-6 トレンチ SA04 柱穴検出状況(南東から) | PL13 | 1. 41-2 中トレンチ SD31、SK138 全景(西から) |
| | 2. 同上(西上から) | 2. 41-2 北トレンチ SD31 北端部(北から) | |
| PL 5 | 1. 42-6 トレンチ築垣と SD27 全景(北西から) | 3. 41-2 北トレンチ全景(東から) | |
| | 2. 42-6 トレンチ北垣張区 SK139 全景(南西から) | 4. 41-3 トレンチ全景(西から) | |
| PL 6 | 1. 42-6 トレンチ SK140 全景(北から) | 5. 東大門地区調査風景(北から) | |
| | 2. 42-6 トレンチ築垣断割り断面(北から) | PL14 | 1. 42-3 トレンチ全景(西から) |
| | 3. 42-6 トレンチ SD27 全景(西から) | 2. 42-4 トレンチ全景(西から) | |
| | 4. 42-6 トレンチ南半全景(南から) | 3. 42-5 北トレンチ SK141 全景(西から) | |
| | 5. 42-6 トレンチ南半 As-B 混土層直下面全景(北西から) | 4. 42-5 北トレンチ SK141 断面(北から) | |
| PL 7 | 1. 42-7 トレンチ全景(南から) | 5. 42-5 南トレンチ全景(西から) | |
| | 2. 同上(南西から) | 6. 42-1 トレンチ全景(東から) | |
| PL 8 | 1. 42-7 トレンチ築垣全景(西から) | 7. 42-1 トレンチ SD33 全景(南西から) | |
| | 2. 42-7 トレンチ築垣と造成土全景(西から) | 8. 42-2 トレンチ全景(北西から) | |
| PL 9 | 1. 42-7 トレンチ暗渠全景(東上から) | PL15 | 伽藍地南辺東部出土遺物(1) |
| | 2. 42-7 トレンチ西壁南端断面(東から) | PL16 | 伽藍地南辺東部出土遺物(2) |
| | 3. 41-1 トレンチ全景(東から) | PL17 | 伽藍地南辺東部出土遺物(3) |
| | 4. 41-1 トレンチと復元南辺築垣(東から) | PL18 | 伽藍地南辺東部出土遺物(4) |
| | 5. 41-1 トレンチ SD29 断面(東から) | PL19 | 伽藍地南辺東部出土遺物(5) |
| PL10 | 1. 42-9 トレンチ全景(北から) | PL20 | 伽藍地南辺西部出土遺物 |
| | 2. 42-9 トレンチ暗渠全景(北東から) | PL21 | 伽藍地東辺部出土遺物 |
| PL11 | 1. 42-9 トレンチ全景(南東から) | | |
| | 2. 42-9 トレンチ SD29 (深) 全景(西から) | | |
| | 3. 42-9 トレンチ SD29 遺物出土状況(東から) | | |
| | 4. 42-9 トレンチ暗渠と復元暗渠(北から) | | |
| | 5. 42-10 トレンチ全景(北から) | | |

I 調査に至る経緯

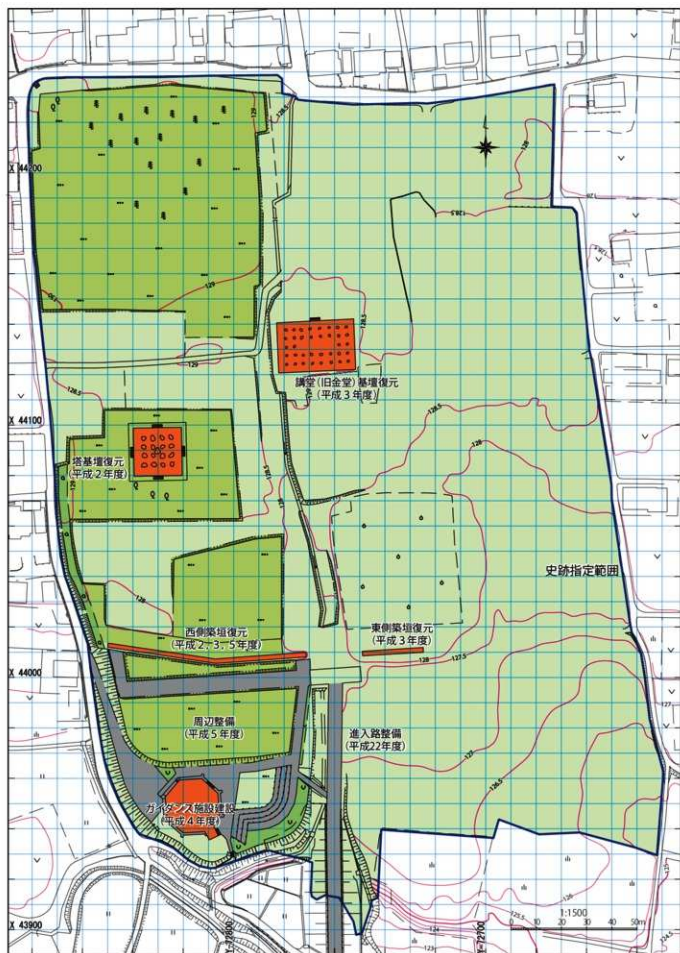
上野国分寺跡は、「日本の歴史の正しい理解のために、欠くことのできない遺跡」として大正15年(1926)10月20日に史蹟に指定された。昭和55(1980)～63年度(1988)の9か年にわたる発掘調査が実施され、その調査研究成果に基づいて平成2(1990)～5(1993)年度に塔と金堂(現講堂)の基壇、南辺築垣の一部が復元された(第1期整備)。これらを復元したところで整備事業は一時中断となったが、第14次群馬県総合計画に基づき、平成24年度(2012)から整備事業を再開することとなった。整備に先立ち、史蹟の基礎情報を再確認するため、平成24～28年度(2016)にかけて5か年にわたる発掘調査を実施した。この調査では、これまで不明であった中門と回廊がはじめて確認されたほか、100年近くにわたって金堂とされてきた建物跡の前面で本来の金堂が発見されるなど、これまで想像されてきた上野国分寺の姿を大きく塗り替える成果をあげることとなった。この第2期調査の成果を『史跡上野国分寺跡第2期発掘調査報告書—総括編—』(以下、『総括報告書』という)として、平成30年(2018)3月に刊行した。しかし、第2期の調査研究を進めるなかで、南大門が八脚門ではなく五間門であった可能性が高まり、南大門を五間門として整備するには基礎情報がまだ不足していることがわかってきた。また、東大門の礎石が史跡指定地外で確認されていたことから、東大門や東辺区画施設等、指定地外における国分寺関連遺構の有無を確認する必要がある。これらの課題を解決するため、平成30年度に追加調査を実施することとなった。



第1図 史跡の位置



第2図 史跡周辺の地形



第3図 史跡現況図

II 発掘調査の方法と経過

1 調査組織

発掘調査は群馬県教育委員会の直営とし、文化財保護課職員が担当した。また、有識者からなる史跡上野国分寺跡整備検討委員会(令和元年度～整備推進委員会)を組織し、その委員会の指導の下、調査を進めた。

委員

- 前澤和之 群馬県地域文化研究協議会会長(古代史：委員長)
須田 勉 元国土館大学文学部教授(考古学：副委員長)
藤井恵介 東京大学名誉教授・東京藝術大学客員教授(建築史)
佐藤 信 東京大学名誉教授・大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事(古代史)
小野健吉 和歌山大学観光学部教授(庭園史)

指導助言

- 浅野啓介 文化庁文化財第二課史跡部門文化財調査官
中井將胤 文化庁文化資源活用課整備部門文化財調査官
川畑 純 文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門文部科学技官

オブザーバー

- 高原啓成(平成30)、佐藤貴昭(令和元) 県生活文化スポーツ部文化振興課東国文化推進室長
田中隆夫 前橋市教育委員会事務局文化財保護課長
角田真也 高崎市教育委員会事務局文化財保護課長
眞塩満之 上野国分寺まつり実行委員会未来地域づくり部会長
淡嶋 慧 上野国分寺遺跡愛好会会長
阿部明雄 前橋市元総社地区自治会連合会長

事務局

平成30年度

古澤勝幸(文化財保護課長)、青木道則(次長)、桜井美枝(補佐(埋蔵文化財係長))、齊藤英敏(文化財活用係長)、橋本 淳(指導主事：調査担当)、堀込真紀子(主幹：庶務担当)

令和元年度

柴野敦雄(文化財保護課長)、福田一也(次長)、桜井美枝(文化財専門官)、齊藤英敏(補佐(文化財活用係長))、飯森康広(埋蔵文化財係長)、橋本 淳(指導主事：調査担当)、堀込真紀子(主幹：庶務担当)

2 発掘調査の目的と調査区

平成30年度

南大門と東大門の調査を計画した。南大門については、今後の整備に向けたさらなる情報を得るため41-1トレンチを設定した。特に、『総括報告書』において南大門は八脚門ではなく五間門であった可能性を指摘したが、遺構での根拠を検出することを目的とした。また、南辺東部では築垣が壊れた後に内溝が掘られていたことが確認されたことから、南辺西部にも対応する内溝が存在するかを併せて確認することとした。41-1トレンチは第1期23次西扯張区・31次調査区の再調査となる。東大門については、現在確認されている礎石が史跡指定地外の現道下にあることから、今後の追加指定を

視野に入れ、門の構造を確認するため現道東の民有地を借地して調査を行うこととし、41-2,3トレンチを設定した。併せて、築垣や掘立柱塼など東辺の区画施設が検出されるか確認することとした。

令和元年度

伽藍地東西南辺と伽藍地南東部の調査を計画した。東西辺については、平成30年度41-2トレンチで検出した溝が外郭溝として伽藍地周囲をめぐるかを確認するため、西辺に42-1,2トレンチ、東辺に42-3,4トレンチを設定した。また、東辺南端部に築垣の痕跡が疑われる高まりがあることから、42-5トレンチを設定して確認することとした。南辺については、まず東部で築垣内外の様相と変遷を捉えるため、築垣が明瞭に残存していた第1期23次東調査区東壁際に42-6トレンチを設定し、再調査及び南部の新規調査を行うこととした。また23次東調査区では、築垣内溝に向かう南北方向の溝状遺構が東壁際に沿うように検出されていたため、併せてその確認を行うこととした。伽藍地南東部は谷地形となることが第2期調査で判明したが、その谷地形に対してどのように築垣を構築したかの確認が不十分であったため、42-7トレンチを設定して確認を行うこととした。42-8トレンチは、谷地形の横断面を確認することを目的とした。南辺西部については、現状で第1期整備事業により築垣が復元されており、その築垣は屈曲した形状となっている。『総括報告書』では、第1期の調査研究成果を再検証したうえで屈曲した形状に疑問を呈し、直線状であった可能性を提起した。その課題を解明するため、42-9,10トレンチを設定した。築垣本体の調査は不可能であることから、内溝の検出を目指して調査を行うこととした。42-10トレンチは第1期27次調査区の再調査であり、このトレンチのみ築垣が地面を掘り込んで造られたとの報告があるため、併せてその状況を確認することとした。

○平成30年度

(面積：㎡)

トレンチ名	目的	面積	総面積	調査期間
41-1	南大門・南辺西部の調査	31	88	平成30年5月6日～ 平成30年6月30日
41-2	南大門・東辺部の調査	49		
41-3	南大門の調査	8		

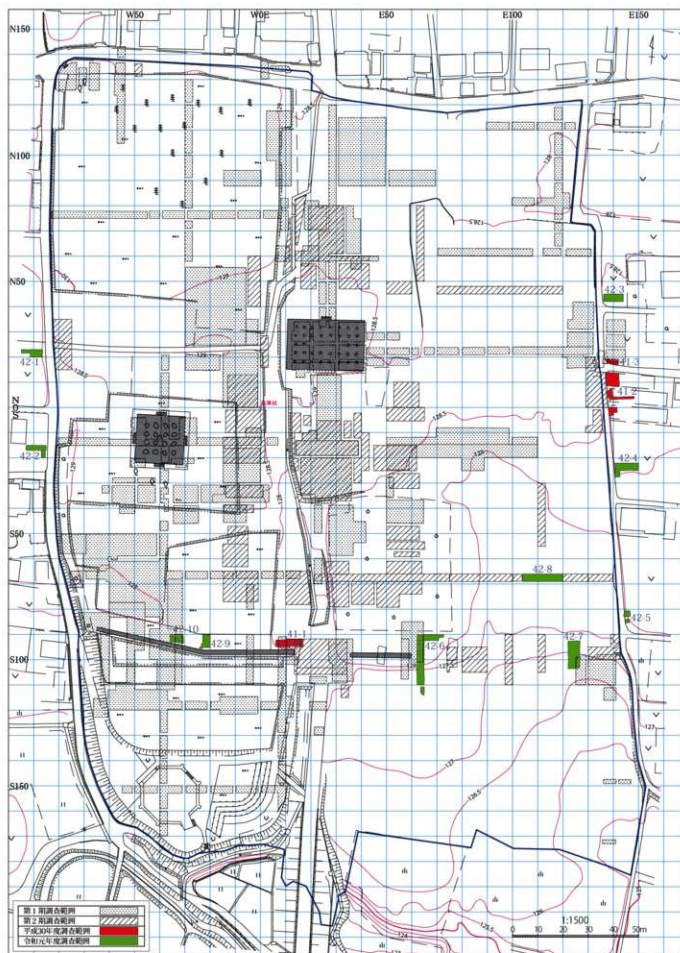
○令和元年度

トレンチ名	目的	面積	総面積	調査期間
42-1	西辺部の調査	18	308	令和元年5月8日～ 令和元年9月25日
42-2	西辺部の調査	19		
42-3	東辺部の調査	22		
42-4	東辺部の調査	30		
42-5	東辺部の調査	7		
42-6	南辺東部の調査	83		
42-7	南辺東部の調査	49		
42-8	伽藍地南東部の調査	48		
42-9	南辺西部の調査	16		
42-10	南辺西部の調査	16		

3 発掘調査の方法

発掘調査は、第1期調査との継続性を重視しつつ、史跡の保存目的調査の方針に基づき、以下のとおりとした。

- 1 グリッドは、第1期調査の調査区と方位を合わせるよう、第1期の方法を踏襲して設定した。旧日本測地系第IV座標系X=43750、Y=-72500を基準点とし、座標北より4°西偏させている。基準点(0-0)を中心とし、東・西・南・北をE・W・S・Nで表し、基準点からの距離(m)との



第4図 年度別調査区配置図

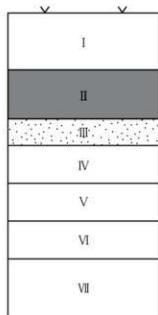
組み合わせで示した。なお、基準点(0-0)は世界測地系(測地成果2011)では、 $X = 44104.843$
 $Y = 72791.281$ である。

- 2 調査区の名称は、第2期調査においては年度ごとに○次としている。平成28年度の40次調査まで実施しているため平成31年度を41次、令和元年度を42次とした。それに、年度ごとのトレンチNoをハイフンで付して、41-1トレンチのように呼称した。
- 3 発掘調査は表土掘削も含め、人力による掘削を基本とした。ただし、遺跡等で硬化した場所や第1期調査区の再調査の際は、細心の注意を払いながら重機による表土掘削を行った。
- 4 発掘調査は、地下遺構の保存を前提として行うため、調査方法は平面での確認を原則としたが、遺構の堆積状況や時期を確認する必要がある場合に関しては、サブトレンチによる断削り調査を行った。
- 5 遺構測量は外部委託とし、調査担当者の指示の下、トータルステーションによるデジタル遺構図を作成した。縮尺は1/20を基本とし、状況に応じて1/10、1/40で記録した。
- 6 記録写真は、35mmモノクロフィルム、35mmリバーサルフィルムを用いた。合わせて、一眼レフデジタルカメラによる撮影を行った。
- 7 埋め戻しの際には、遺構確認面に遺構保護用の山砂を10cm弱敷きつめた後、重機による埋め戻し作業を行った。
- 8 発掘調査期間中に整備検討(推進)委員会を開催し、委員による発掘調査状況の視察・指導を受けながら調査を進めた。

4 基本土層

基本土層は、右模式図のとおりである。

- I層 表土層 現耕作土。
- II層 As-B 混土層
耕作等によりAs-Bが攪拌され、多量にAs-B軽石を含む砂質土層。伽藍地南東部の低地部や溝埋土の上層などに認められる。15世紀前半の墓塚がこの層を掘り込むため、それ以前の所産と判断される。
- III層 As-B (純堆積層)
天仁元年(1108)の浅間山噴火によって降下したテフラ。今回の調査ではほとんど確認できないが、42-6, 7トレンチのSD27埋土中のII層最下部にのみ純層に近い堆積が認められ、軽石上層に小豆色の火山灰層の堆積も見られた。
- IV層 As-C 混黒褐色土
3世紀末の浅間山噴火によって降下した軽石を含む黒褐色土層。築垣の盛土直下、伽藍地南東部の谷地を埋めた土層の直下で検出されることから、IV層上面が国分寺創建時の地表面と考えられる。
- V層 黒褐色土
As-C 軽石を含まない緻密でしまりのよい層。As-C降下以前の堆積層。
- VI層 暗褐色土 漸移層。
- VII層 黄褐色土 基盤層となる総社砂層。約1.8万年前の岩屑なだれ以降に堆積した洪水堆積物。



第5図 基本土層模式図

5 発掘調査の経過

平成30年度

南大門、東大門及び東辺区画施設の調査を実施した。41-1トレンチでは、南大門北西角の掘込地業を検出すべく調査を行ったが、確認面のレベルが低く痕跡は確認できなかった。しかし、南辺東部の内溝(SD27)に対応するとみられる西部の内溝(SD29)が存在することを確認した。東大門地区の調査では、41-2,3トレンチとともに東大門に関連する遺構は全く確認できなかった。41-2トレンチは南北に3棟並ぶビニールハウス内の調査であるため、グリッドラインにこだわらずハウス内で掘れる範囲に調査区を設定した。北棟で遺構が確認できなかったため南棟の調査を行ったところ、東西方向の中世溝(SD30)と南北方向の古代溝(SD31)、SD31の東縁を掘り込む溝状遺構が検出された。南棟では東側への拡張が不可能であったため中棟の調査を行い、SD31北端の確認とSD31東縁を掘り込む溝状遺構の東縁の確認を行うこととした。SD31北端は中棟内では確認できず、北棟南端まで伸びていることが分かった。1m幅で複数回にわたって東側に拡張したところ、E147.3の位置で立ち上がりを確認され、幅が6.5mあることが判明した。この落ち込みは北棟までは伸びていかず、底面も平坦ではないことから土採り穴(SK138)と推定した。SD31は外郭溝の可能性のあるものとして、次年度に継続調査を行うこととした。

令和元年度

前年度に東辺で確認された溝(SD31)が外周をめぐるか確認するため、東辺に2か所、西辺に2か所、計4か所のトレンチ調査を行ったが溝のつづきは確認されず、SD31の評価が難しくなった。東辺南端部の42-5トレンチの位置は、現道に沿って若干の高まりがあり、樹木が1列植わっている状況である。この高まりが築垣ないし土塁の痕跡とも考えられたため調査を行ったが、盛土の痕跡は全く認められず、逆に低い場所にあるべきAs-B混土層(Ⅱ層)が確認された。下層からは柱穴と考えられる土坑1基が検出されたため、掘立柱建物を想定し南区を設定して調査を行ったが、関連する土坑は検出されなかった。東西辺の調査を終え、南辺東部42-6トレンチの調査に着手した。トレンチ北部の第1期再調査区では、明瞭に残る築垣やSD27を再確認することができた。また、東壁際の溝状遺構が再確認できたため、その東西幅を確認することとし、北壁際を2.5m幅で東側に拡張を行った。3回に分けて少しずつトレンチを伸ばしていったが、8m掘っても立ち上がりが確認できず掘削土量も相当なものであったため、E73まで掘ったところでそれ以上掘り進めるのを断念した。南部の新規調査区では、表土及びAs-B混土層(Ⅱ層)を除去した状態で一度記録をとり、東半のみ地山まで掘り下げを行った。42-7トレンチは谷地部にあたり、確認面が深いことが予想されたため重機による表土掘削を行った。As-B混土層(Ⅱ層)を除去し、西壁に段を設けて東西2.5m幅でさらに人力による掘り下げを行った。S98付近では、築垣と推定される粘質の黄褐色土の広がり認められ、その内外には褐色土が厚く堆積していた。築垣の残存状況を確認するため内外の褐色土を除去しつつ、築垣構築の状況を確認するため西壁際にサブトレンチを設定して地山面まで掘り下げを行った。安全面を考え、壁面に段をつけて掘り下げていたものの地山までの深さが4m近くにも達し、また完掘する直前で大雨や台風によって西壁が緩み、崩落の危険性が生じた。これにより急速サブトレンチの埋め戻しを行ったため西壁の断面図の記録がとれず、かろうじて柱状図で記録することとなった。42-8トレンチは時間的余裕がなく、表土を除去したのみで下層の調査は断念した。42-9,10トレンチは内溝の確認を目的としたもので、前年度に確認したSD29の延長を確認した。このSD29は、復元築垣に沿って屈曲することではなく直線状に伸びていくことが明らかとなった。



黒数字・現況表部高値 赤数字・調査内確認高値

第6図 遺跡全体図

図中の黄色の線は発掘調査の経過を示すものであり、平面図に確認されたもの、赤線は平成30年度調査の範囲を示すものであり、調査範囲外の調査結果は、調査範囲外の調査結果を示すもの、その他の色の調査結果は、調査範囲外を示すもの。

Ⅲ 発掘調査の成果

1 伽藍地南辺東部

(1) 42-6トレンチ(第7～14図、PL. 2～6, 15～17)

現状で南辺築垣が調査でき、なおかつ最も残存の良好と考えられる箇所に42-6トレンチを設定した。築垣の状況を確認するとともに、築垣内外の遺構の様子も併せて確認するため、トレンチは幅3m・南北20mとした。S90～S101は第1期23次東調査区の再調査であり、S101以南は新規に調査したものである(第7図)。再調査であるS101以北は、第1期調査時の確認面まで掘り下げたところ、SD27と東壁際の溝状遺構が底面まで掘り切っていないことが確認されたため、さらに掘り下げを行った。これにより、東壁際の溝状遺構は明らかに南北方向に掘られていることが分かったため、その東西幅を確認すべくトレンチ北壁際に2.5m幅で東側に拡張を行った。3回に分けてトレンチを伸ばしていったが、8m掘っても立ち上がりが確認できないためE73まで掘り進めるのを断念した。この東西の広がりから、東壁際の溝状遺構は溝ではなく大規模な土坑(SK139)であると判断した。また、調査前はSK139はSD27に合流する南北方向の溝と考えていたが、SD27・築垣の下を抜けてさらに南に伸びていることが判明するとともに、土層断面観察から築垣よりも古い時期の土坑であることが明らかとなった。S101以南は、表土及びAs-B混土層(Ⅱ層)を除去した状態で一度記録をとり、東半のみ地山面まで掘り下げを行った。褐色土が厚く堆積して平面での確認は困難であったため地山面まで下げ、底面の形状と東壁の土層断面観察により遺構の認定を行った。南半部は一段低くなっており、地山が黄褐色土(VII層)であったことから、人為的に掘られた遺構(SK140)と判断したが、トレンチ南端まで掘り進めても立ち上がりが検出されなかったため、1.5m幅でS114まで拡張したところ、S111.6の位置で立ち上がりが確認された。

① 築垣

S97.3～S100.1の位置で基部を確認した。基底幅幅2.8m、上端幅1.4mの台形状で、高さ65cm程が残存する。北縁は、SD27によって若干壊されている可能性がある。西半断面の位置(第8図断面B)では、標高127.0mの地山(Ⅳ層)の上に厚さ15～30cmの暗褐色土を2層盛り、その上に薄く明黄褐色土を積み上げ、さらにその上に黄褐色土を盛っている。版築といえるほどの縮まりは見られない。地山直上の暗褐色土の下底部幅は2.8m、黄褐色土の下底部幅は1.7mであり、下部暗褐色土2層の高さは45cm(1.5尺)程、黄褐色土の高さは20cm程を測る。この規模から、下部暗褐色土2層を基部盛土、黄褐色土を築垣本体の築土とするのが妥当と考えられる。

東半部は西半部とは対照的に、版築により基部盛土を造成している(第8図断面A)。1単元5～10cm程の厚さで8層積み上げており、高さは55cm程を測る。その上に西半部と同じ黄褐色土を盛っており、高さ20cm程が残っている。トレンチ内の東西において造成の方法が異なるため、北壁際を断ち割って状況を確認したところ(第8図断面D)、東部の版築を行った後に西部の盛土を行っていることが確認された。

② SA04

第1期調査時に掘り下げられていた西側のサブトレンチの埋土を除去し底面を精査したところ、柱穴1個(P7)を検出した。検出したのは柱穴の東半部のみであるが、丸隅の方形状を呈し、南北長は90cmを測る。南側に浅い皿状の落ち込みがあるが、柱穴とは関連性がないものと考えられる。径28cmの柱痕と考えられる落ち込みも確認された。平成28年度調査の40-12トレンチで検出したSA04-P1～P6に連続するものと考えられるが、今回のP7はやや南寄りに掘られており、一直

線状にはなっていない。P1～P6は方位軸が調査グリッドラインにほぼ一致し、柱痕の中心が概ねS98.25であるのに対し、今回確認したP7の柱痕の中心はS98.85の位置となる。さらに、P7の東に位置する柱穴を検出すべく精査を行ったが、トレンチ内東部のサブトレンチ周辺では確認できなかった。

③ SD 27

築垣と並行するよう内側に掘られた溝である。北縁はS94.5、南縁は残存する築垣の北壁と重なる。幅は3m程で、深さは当時の地表面レベルを127.0mとすると75cm程となる。底面レベルは西端で126.5m、東端で126.25m程であり、東に向かって緩やかに下がっている。埋土最上部の1層(第8図断面A)はSD27が埋まりきった後も築垣際に広く堆積し、その後As-Bの降下を迎えている。

④ SD 01

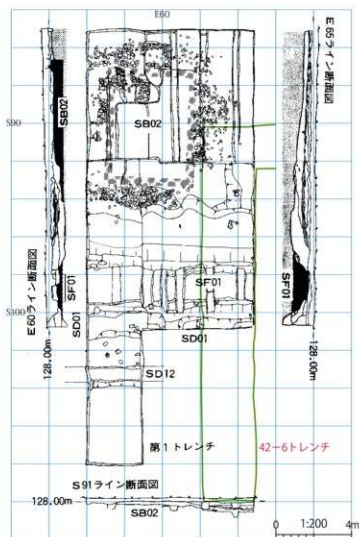
築垣と並行するよう外側に掘られた溝である。北縁は築垣基部盛土の南壁と重なり、トレンチ東壁ではS100.2の位置、南縁はS104.28の位置でSK140に壊されているため、幅は4m強あったと判断される。深さは90cm程を測る。底面は概ね平坦だが、東に向かって緩やかに下がる。埋土底面からは8世紀代の須恵器壺片や国分寺所用瓦のなかでも古相を示す平瓦が出土している(第10図1, 2)。

⑤ SK 139

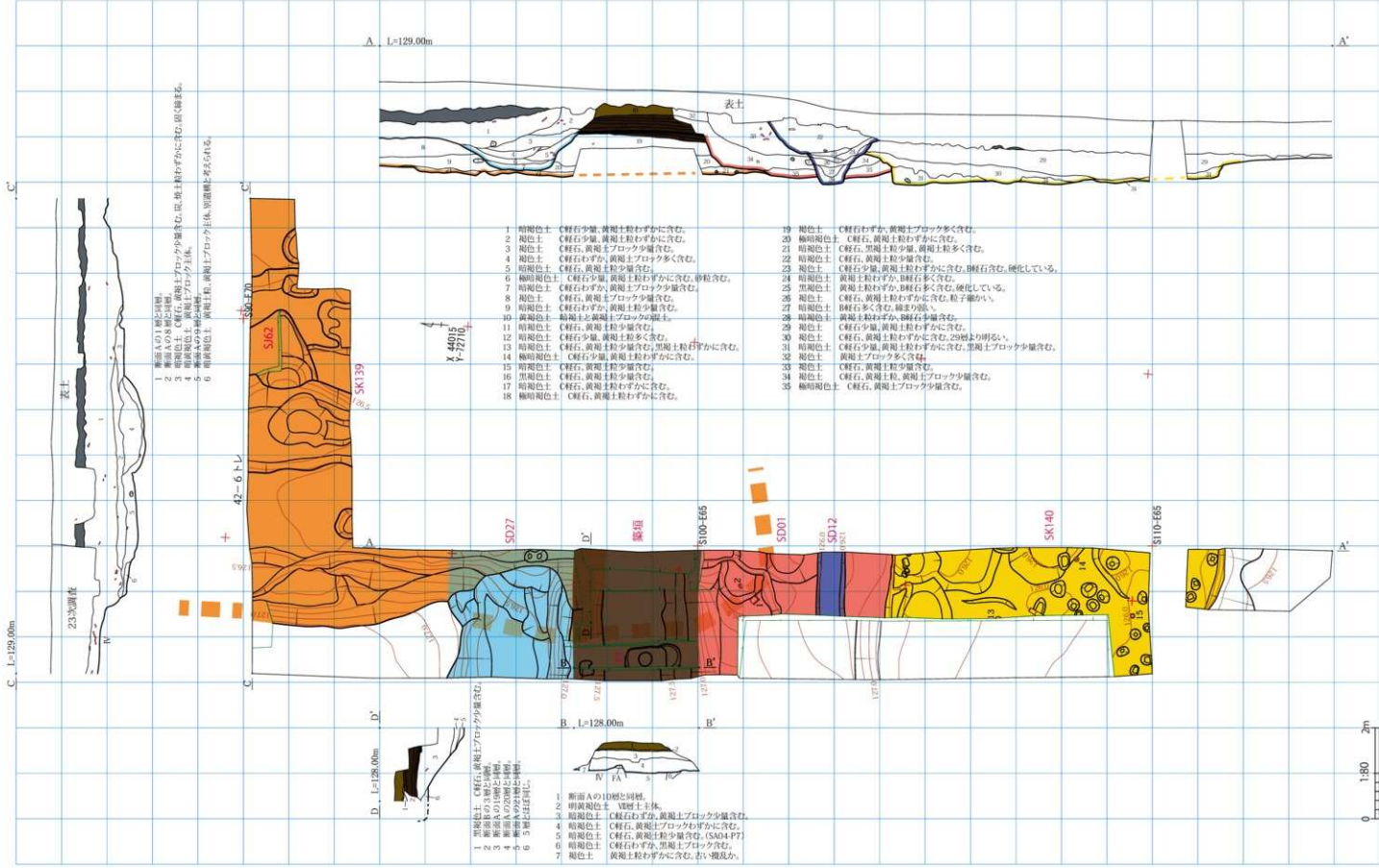
築垣基部盛土の下層から検出された。西縁はE83.2の位置で確認されたが、北縁と東縁はさらに調査区外に伸びている。40-12トレンチ拡張区西壁トレンチで確認された築垣版築層下の落ち込みに続く可能性が高く(第9図)、ここからもう少し東へ伸びると推定される。南縁については、SD01によって壊されているため判然としないが、少なくともS101.5までは伸びている。南北方向に長軸をもつ土坑と考えられ、現状で南北11.5m、東西9.4mを測る。底面は概ね平坦だが、中央付近に南北方向の一段低い溝状の落ち込みが認められる。この溝状落ち込みの埋土4層は黄褐色土ブロックを多く混入しており、人為的に埋められていると判断される。また、築垣基部盛土版築層下の土層19層もまた黄褐色土ブロックを多く混入しており、築垣を造成するために人為的に埋められていると判断される。

⑥ SK 140

S104.1～S111.6の幅7.5mの規模をもつ。北縁はSD01南縁を掘り込んでいる。底面レベルは



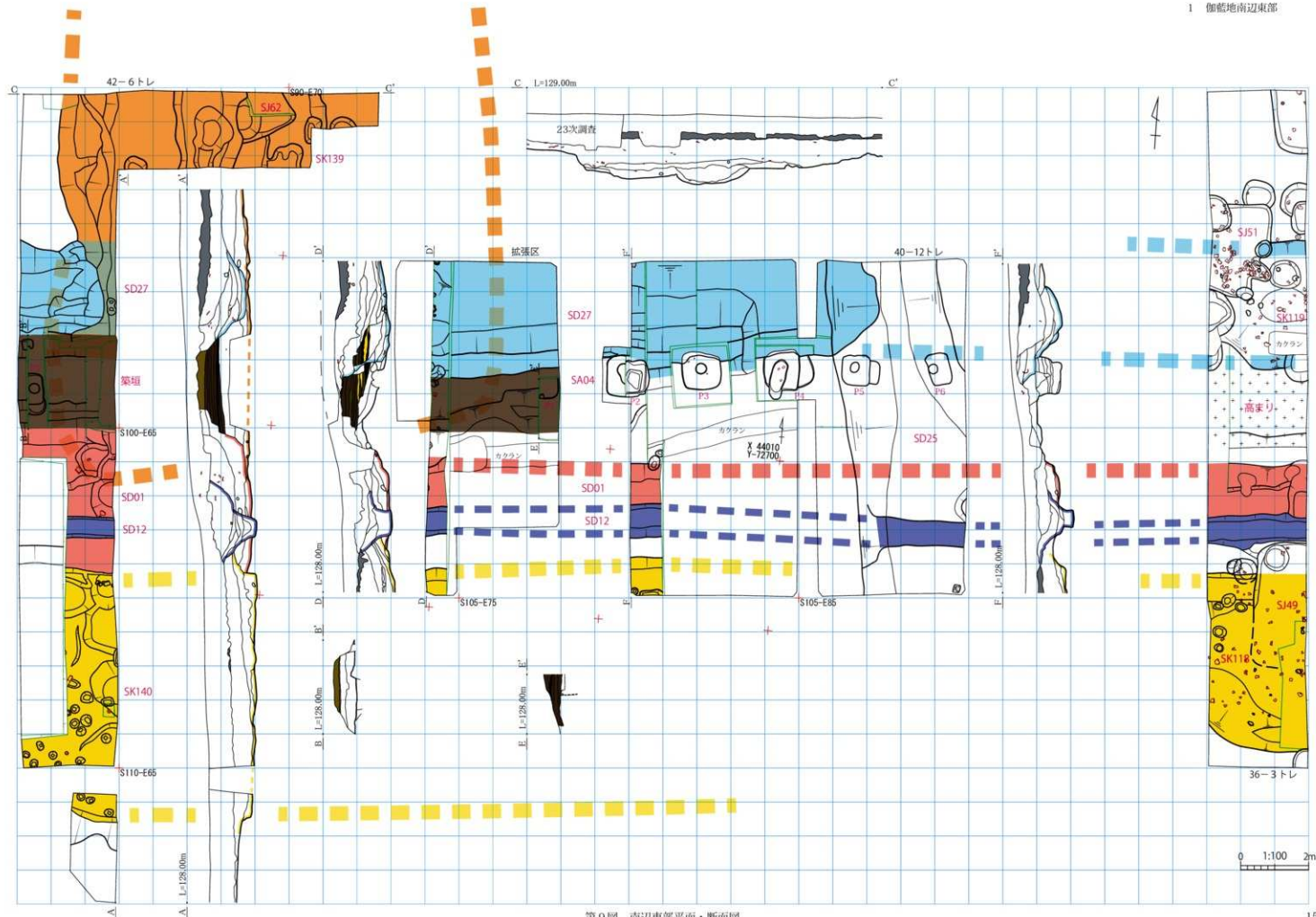
第7図 第1期23次東調査区平面・断面図



1 断面Aの10種と同様。
 2 断面Aの10種と同様。
 3 明褐色土、C軽石、黄褐土ブロック少量含む。底土表層わずかに含む。原状層。
 4 明褐色土、C軽石、黄褐土ブロック主体。
 5 暗褐色土の砂礫と団粒。
 6 暗褐色土の砂礫と団粒。
 7 暗褐色土、黄褐土粒、黄褐土ブロック主体。黄褐土と赤土5:5の混り。

- 1 暗褐色土 C軽石少量、黄褐土粒わずかに含む。
- 2 褐色土 C軽石少量、黄褐土粒わずかに含む。
- 3 褐色土 C軽石、黄褐土ブロック少量含む。
- 4 褐色土 C軽石わずかに含む。
- 5 暗褐色土 C軽石、黄褐土粒少量含む。
- 6 暗褐色土 C軽石少量、黄褐土粒わずかに含む。砂粒含む。
- 7 暗褐色土 C軽石わずかに含む。
- 8 褐色土 C軽石、黄褐土ブロック少量含む。
- 9 暗褐色土 C軽石わずかに含む。
- 10 暗褐色土 粘厚土と黄褐土ブロックの混り。
- 11 暗褐色土 C軽石、黄褐土粒少量含む。
- 12 暗褐色土 C軽石少量、黄褐土粒多量含む。
- 13 暗褐色土 C軽石、黄褐土粒少量含む。黄褐土粒わずかに含む。
- 14 暗褐色土 C軽石少量、黄褐土粒わずかに含む。
- 15 暗褐色土 C軽石、黄褐土粒少量含む。
- 16 暗褐色土 C軽石、黄褐土粒少量含む。
- 17 暗褐色土 C軽石、黄褐土粒わずかに含む。
- 18 暗褐色土 C軽石、黄褐土粒わずかに含む。
- 19 褐色土 C軽石わずかに含む。黄褐土ブロック多量含む。
- 20 暗褐色土 C軽石、黄褐土粒わずかに含む。
- 21 暗褐色土 C軽石、黄褐土粒少量、黄褐土粒多量含む。
- 22 褐色土 C軽石、黄褐土粒少量含む。
- 23 褐色土 C軽石少量、黄褐土粒わずかに含む。団粒含む。硬化している。
- 24 暗褐色土 黄褐土粒わずかに含む。C軽石多量含む。
- 25 暗褐色土 黄褐土粒わずかに含む。C軽石多量含む。硬化している。
- 26 褐色土 C軽石、黄褐土粒わずかに含む。粒子的い。
- 27 暗褐色土 B軽石多量含む。団粒多い。
- 28 暗褐色土 黄褐土粒わずかに含む。C軽石少量含む。
- 29 褐色土 C軽石少量、黄褐土粒わずかに含む。
- 30 褐色土 C軽石、黄褐土粒わずかに含む。団粒多い。明い。
- 31 暗褐色土 C軽石少量、黄褐土粒わずかに含む。黄褐土ブロック少量含む。
- 32 褐色土 黄褐土ブロック多量含む。
- 33 褐色土 C軽石、黄褐土粒少量含む。
- 34 褐色土 C軽石、黄褐土粒、黄褐土ブロック少量含む。
- 35 暗褐色土 C軽石、黄褐土ブロック少量含む。

第8図 42-6トレンチ平面・断面図



第9図 南辺東部平面・断面図

126.0 m程で概ね平坦であり、旧地表面からの深さは1 m弱と考えられる。壁の下半は垂直気味に掘られている。40-12 トレンチや拡張区、36-3 トレンチでもほぼ同じ位置で、北壁が同様に垂直気味に掘り込まれた落ち込みが確認できることから、これらは全体に連続している可能性が考えられる(第9図)。埋土中からは10世紀代の碗等が出土しているが、そのうちの碗3点を掲載した(第13図13～15)。13は底面直上で出土したが、14は35cm、15は44cm底面から浮いた状態で出土している。

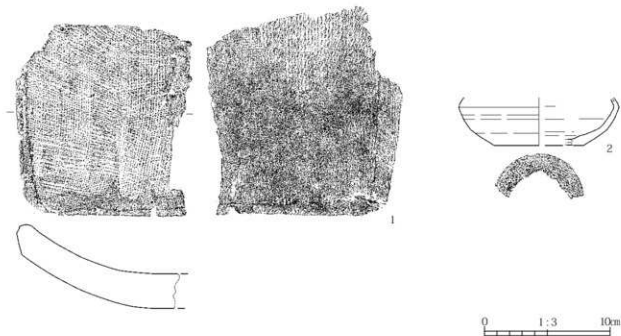
⑦SD12

下部は幅60cm程の箱状だが、上部は開く形状を呈す。埋土中にAs-Bの二次堆積が認められることから、As-B降下(1108年)以降に掘られた溝と判断できる。

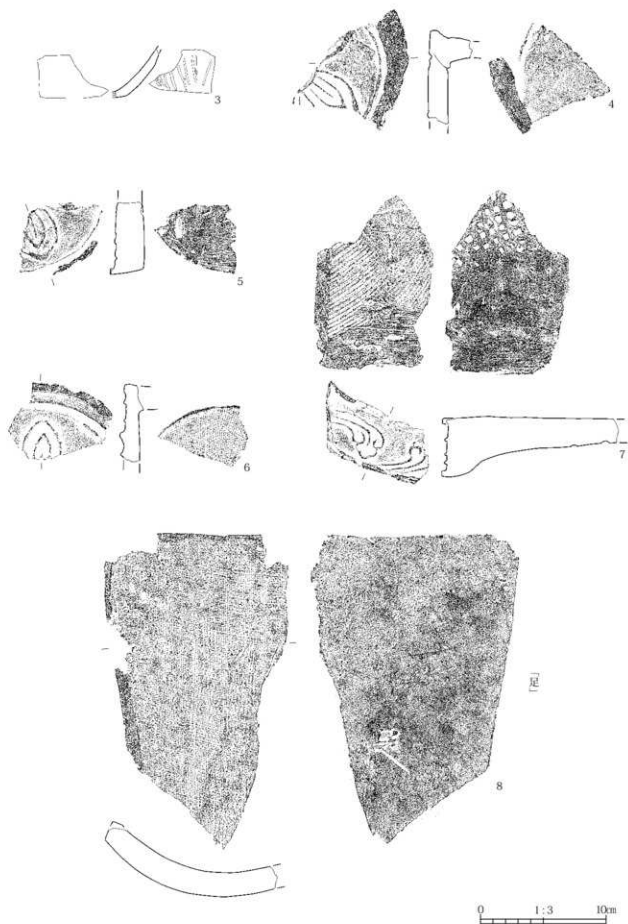
⑧所見

42-6 トレンチで確認された最も古い遺構はSK139であり、その規模から築垣造成以前に掘られた土採り穴と考えられる。埋土中から大量の瓦が出土することから、国分寺存続期であることは間違いない。伽藍地区画施設を造営する以前の土採り穴であることから、主要伽藍造営用の土を採るために掘られた穴であると推定される。黒褐色土とその下層の黄褐色土を採取したのだろう。しかし、その後区画施設を造営するために、造営箇所が埋め戻されている。将来的に区画施設を造る場所であるにも関わらず、土を採るための大きな穴を掘り、後になって区画施設を造るために当該箇所を埋め戻すという行為は、伽藍造営の計画性という面から見て興味深い事例と考えられる。それほど主要伽藍の造営を急いでいたのであろうか。なお、区画施設を造るために埋め戻された箇所以外は、SK139の穴は開いたままだったようである。

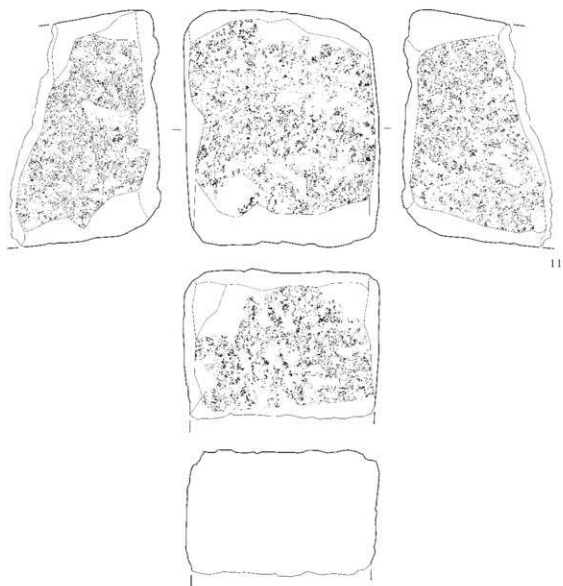
南辺区画施設としては、まずSA04が構築され、その後、SA04を取り壊して築垣を造成する。築垣と並行するように外側に掘られたSK140は、築垣造成用の土を採るために掘られたものと考えられる。築垣崩壊後にはSD27を掘って区画溝とし、これが最終段階と判断される。



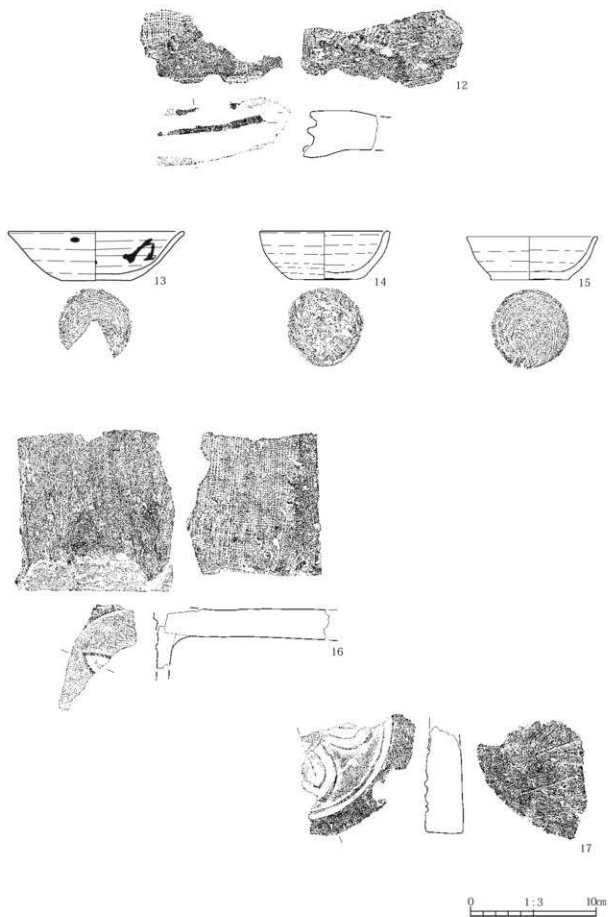
第10図 SD01出土遺物



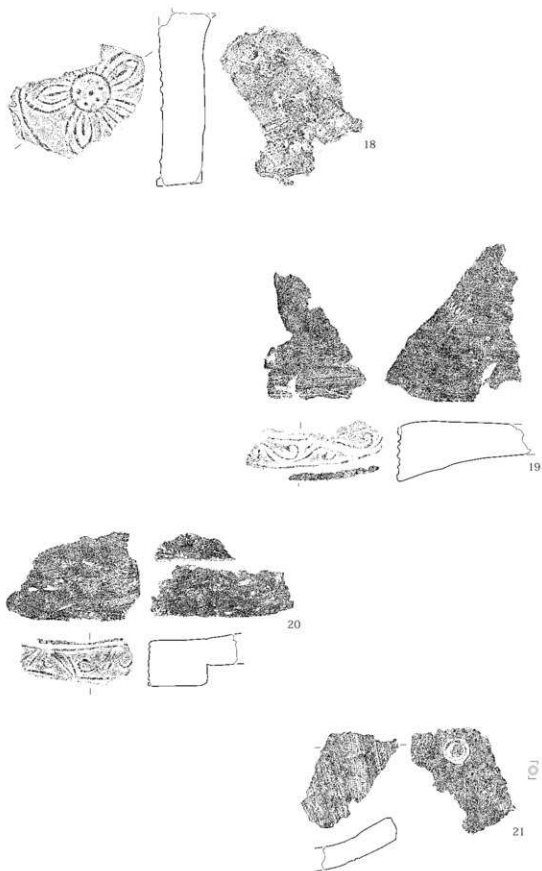
第11図 SK139 出土遺物(1)



第12図 SK139 出土遺物(2)



第13図 SK140 (12～15)・42-6トレンチ出土遺物(1)



第14図 42-6トレンチ出土遺物(2)

(2) 42-7トレンチ(第15～19図、PL. 7～9, 17～19)

42-7トレンチは伽藍地南東部の谷地にあたる地区で、南辺築垣想定位置に東西5m・南北12mの調査区を設定した。すぐ東側では、第2期40-9トレンチの調査を行っている(第16図)。この調査によって、伽藍地南東部が谷地形であることが明らかとなり、築垣想定位置に版築状に盛土している状況が確認されていた。今回は、谷地での築垣の存在を確かなものにするということ、谷地形に対して築垣をどのように構築したのかを解明するため調査に臨んだ。As-B混土層(Ⅱ層)を除去したところで北部の深さは2m近くに達したため、安全性と作業効率を考え、壁面に段を設けてトレンチ内にさらに東西2.5m、南北9m程の調査区を設定して掘り下げを進めた。その結果、築垣や造成土を確認することができた。さらに、築垣構築の状況を確認するため、西壁際にサブトレンチを設定して地山面までの掘り下げを行った。しかし、サブトレンチの深さが最終的に4m近くにも達し、壁面崩落の危険性が生じたため、最も重要な断割り断面図を記録することは断念せざるを得なかった。

① 築垣

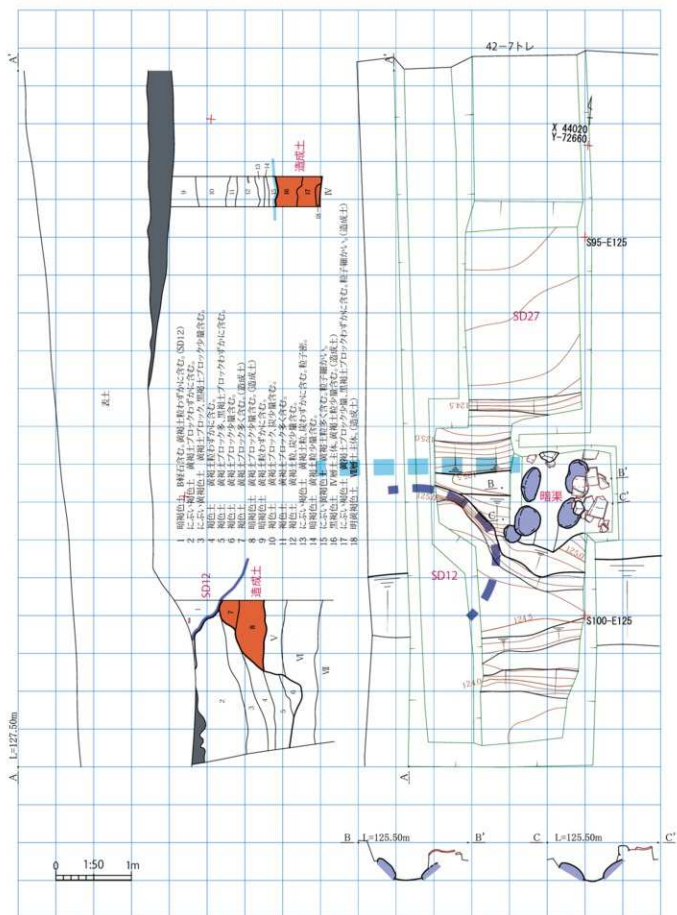
築垣を構築するために谷地を埋めて造成した痕跡と築垣基部盛土、築垣基部盛土に付設した石組の暗渠を確認した。造成土の南端はS101付近で確認され、これ以北は調査区北壁まで全体にわたって盛土がなされていたため、北端については確認できなかった。築垣造成にあたって、少なくとも南北8m以上の幅で谷地を埋めたことは確実である。造成土は1～1.5m程の厚さであり、谷地を西側の平坦部と同レベルまでかさ上げすることはせず、若干傾斜を緩くした程度の造成である。柱状図になってしまったが、16～18層が概ね築垣以北に盛られていた。造成土の南縁は、築垣暗渠南端から2m南の位置にあたり、下端レベルは123.8m程である。

築垣基部盛土はS98～S99.5の部分のみ残存していると判断された。粘質の黄褐色土を主として盛っている。南縁は原状をとどめていると考えられるが、S98以北はSD27によって壊されている。また、南西部もSD12によって壊され、えぐられた形状となっている。

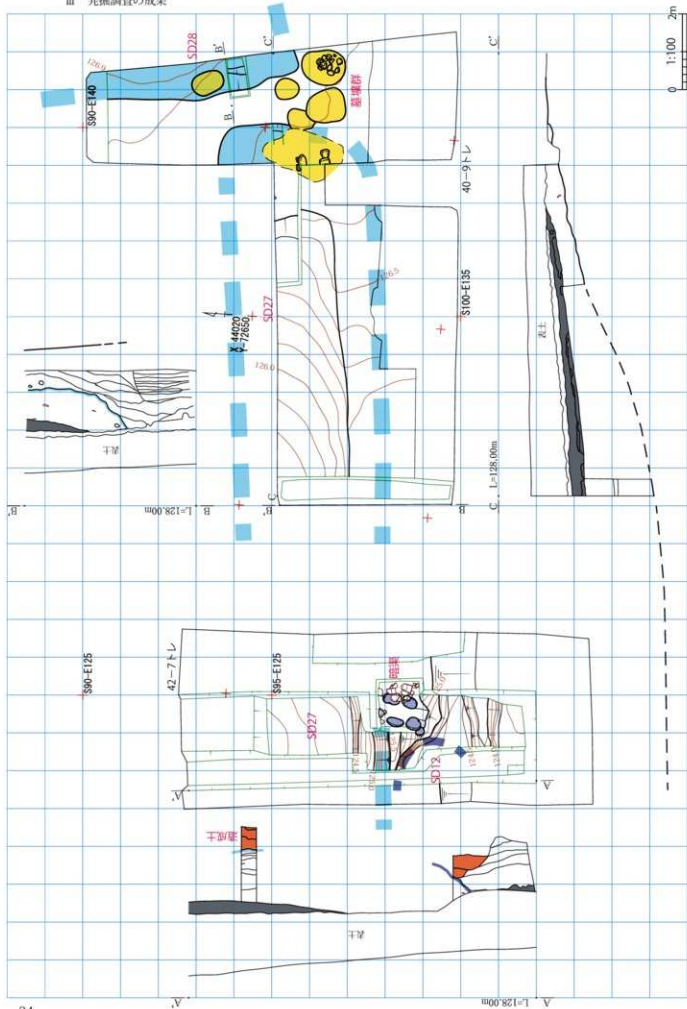
暗渠は、径40～50cm程の扁平な丸石を20～30cmの間隔を空けて、2個ずつ断面V字状に並べていた。東列では平瓦を並べた痕跡も見受けられた。暗渠底面レベルは125.0mであり、造成土の南縁との比高は1.2m程ある。また、42-6トレンチでの旧地表面レベル127.0mに比べ2m低い。暗渠の方位軸はN-5°30'-Eであり、築垣とは直交せず北に対し東に9°あまり振れている。断面図を見ても分かる通り、谷地形の方位は北西-南東方向であり、トレンチ北東部より南西部のほうが地山面の標高が高い。暗渠が付設されたのは谷地の最も低い位置ではなく、西寄りのやや高い箇所と考えられる。

② SD27

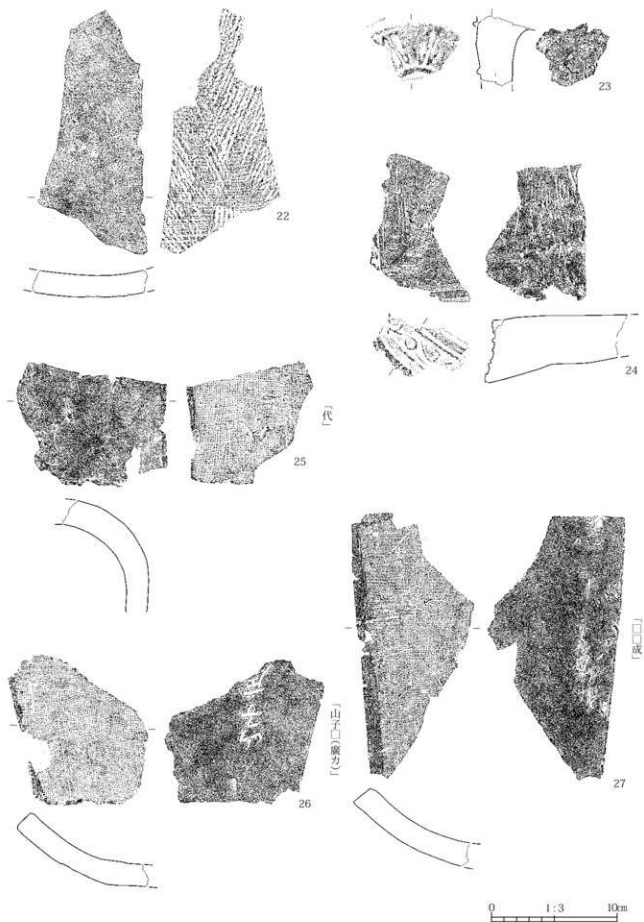
築垣基部を壊すようにS98を南縁として掘り込んでいるが、北縁の立ち上がりは確認されなかった。北側は当初から谷地で、溝底面より低かったことによるものと考えられる。



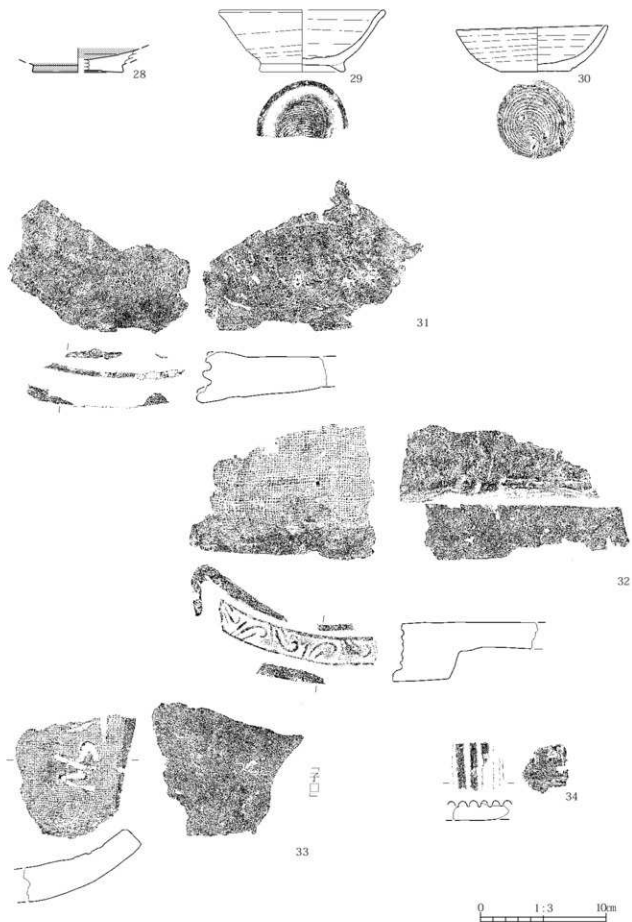
第15図 42-7トレンチ平面・断面図



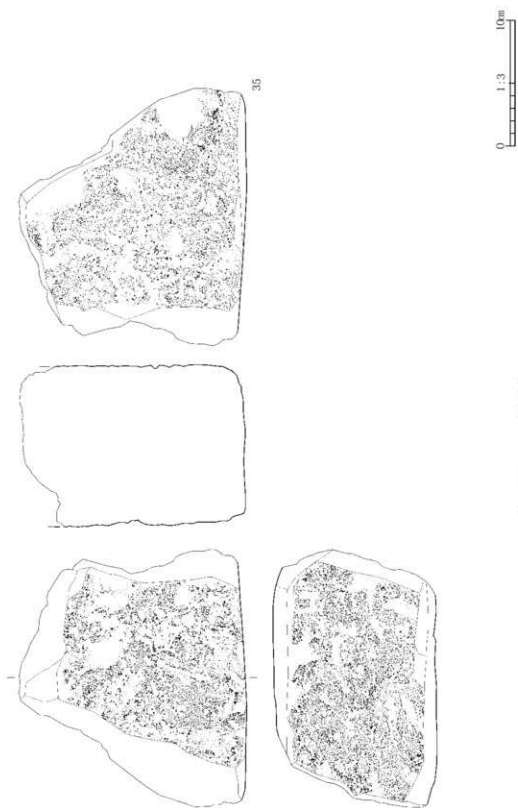
第 16 図 南辺東端部平面・断面図



第17図 42-7トレンチ出土遺物(1)



第18図 42-7トレンチ出土遺物(2)



第 19 圖 SD12 出土遺物

2 伽藍地南辺西部

(1) 41-1トレンチ(第20図、PL. 9)

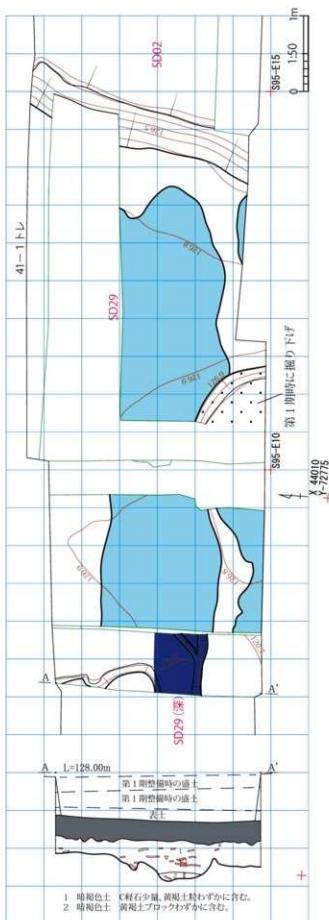
南大門北西角の掘込地業を確認するため、また南辺東部の内溝(SD27)に対応する西部の内溝が存在するかを確認するため、復元築垣の北側に沿って調査区を設定した。第1期23次西拡張区及び31次調査区の再調査であり、確認面は第1期調査時の調査面である。西壁際の断割り(断面A)は今回の調査によるものだが、それ以外の掘削は行ってない。

①南大門

想定した掘込地業は確認されなかった。大部分は中世以降の大溝(SD02)によって破壊されている。SD02西縁とSD29東端との間は地山面(V層：粘質の黒褐色土層)であり、人為的な掘り込みは確認できなかった。確認面レベルは126.7m程である。掘込地業は当初から存在しなかったのか、あるいは掘込地業底面より確認面のレベルが下がってしまっているのか、確証はもてなかった。

②SD29

南辺東部のSD27に対応すると考えられる西部の内溝を確認した。北端部に一段深い幅1m程の溝(以下、SD29(深)という)を掘り、その南側は幅広の浅い落ち込み状となるようである。旧地表面レベルを126.95mとすると、SD29(深)の深さは40cm程である。SD29の東端はE13.74の位置で立ち上がり、これ以东には伸びていけないことが確認された。西壁際の断割りでは、埋土中から多量の瓦片が出土している。埋土最上部の1層は、SD29が埋まりきった後も築垣際に広く堆積し、その後As-Bの降下を迎えている。この堆積状況は、南辺東部のSD27の埋まり方に共通している。



第20図 41-1トレンチ平面・断面図

(2) 42-9トレンチ(第21～23図、PL.10, 11, 20)

築垣内溝の存否を確認すること、確認された場合は溝の走向を確かめること、また第1期調査で確認されていた暗渠の北端を確認することを目的として調査を実施した。W20～W23の表土を除去したが、調査にかける時間的余裕がなかったため東半部1.5m幅をトレンチ状に掘り下げた。また、暗渠北端を確認するためW23～W24の部分の調査を行った。

①SD29

41-1トレンチから続くSD29(深)と考えられる溝を検出した。幅1m、深さ60cm程を測る。この溝が一旦立ち上がり、また南側に緩やかに下がりながら深さ25cm程の浅い落ち込みとなっており、41-1トレンチで確認された状況と共通する。埋土中からは10～11世紀代の須臾器械が複数出土しており(第23図)、時期的にも南辺東部のSD27と同時に存在を示すものである。

②暗渠

第1期調査で確認されていた築垣下の暗渠の北端部を再確認した。底面に角閃石安山岩の切石を敷き、側面には平瓦を積み上げている。底面に敷いてある切石は被熱しており、上面は焦げた様子で黒ずみ、側面は赤化している。切石上面(暗渠底面)のレベルは127.0mである。暗渠の北側(W20.5～W24)には土坑を連ねたような落ち込みが検出されており、排水を暗渠に誘導するような機能をもたせたものと考えられる。

③SJ64

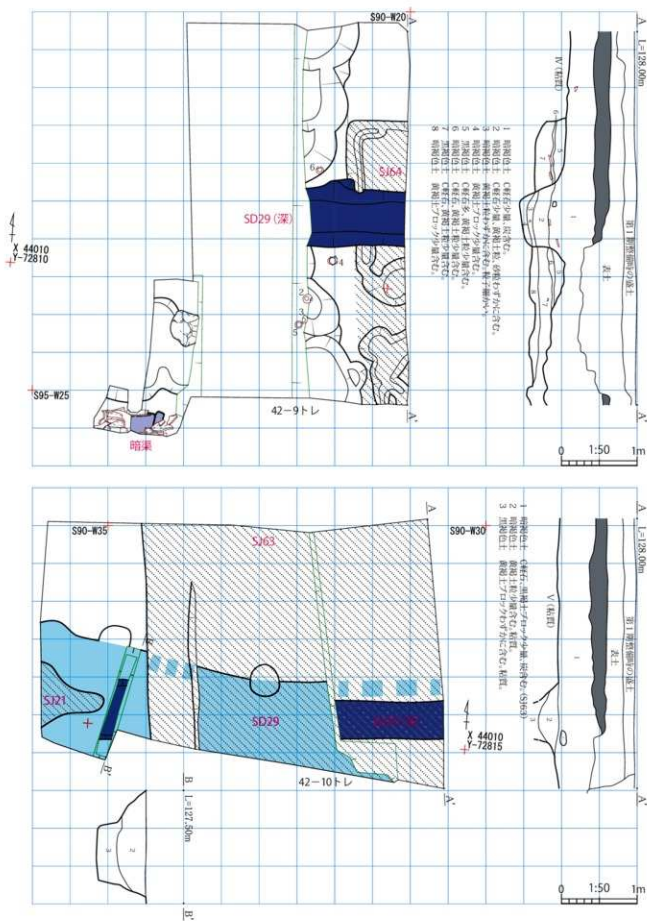
SD29の下層から検出された。北西角は明瞭であるが、SD29(深)以南はSD29埋土との判別が難しく平面的な確認はできなかった。第21図のトレンチ南東部にある複数の落ち込みはSJ64の掘り方によるものと考えられる。埋土中から時期を示す土器類は出土しなかったが、瓦片が含まれるため10世紀以前の国分寺存続期の所産と判断される。

(3) 42-10トレンチ(第21, 22, 24, 25図、PL.11, 12, 20)

W31～W34は第1期2号トレンチの、W34～W36は第1期27次調査区の再調査である。42-9トレンチ同様、内溝の存否と走向の確認を目的とした。また27次調査区では、地山を70cm程掘り下げて築垣を造成したとの報告があるため、その状況の確認を行った。W31より50cm弱、東に広がっている部分は、新たな壁面での断面観察を行うため拡張している。調査は、第1期調査の確認面を精査を行ったが、東壁からW32の範囲はSD29の走向を確実に把握するため、さらに掘り下げたものである。

①SD29

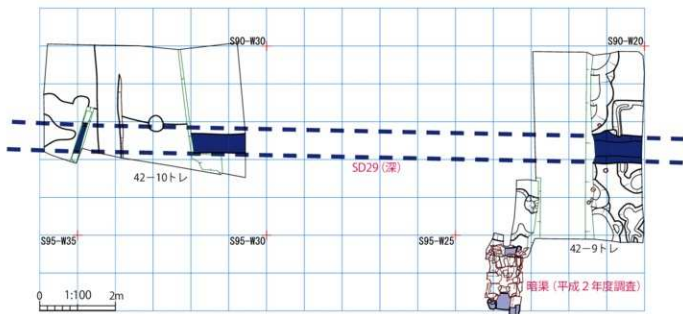
SJ63の下層で確認された。東部の深掘り地区でSD29(深)を平面的に明瞭に確認するとともに、これ以西でも平面的に確認した。また、27次調査で「掘り込んで造った築垣」とされた落ち込みを断ち割ったところ(第21図下断面B)、SD29(深)であることを確認した。断ち割り部分で見ると、SD29(深)は上部が開き、下部は箱状に垂直気味に掘られており、深さ65cmを測る。箱状の上端幅は80cmである。第1期27次調査の所見ではこの落ち込みを築垣と比定し、「標高127.15m付近にあり旧地表面とみられる自然堆積の黒褐色粘質土を、断面逆台形状に約70cm掘り下げて固く締まった黄褐色土中に底面を造り、その内部に軽石混り黒褐色土を主体とする粘性の強い土を積み上げている」と報告されていたが(第24図)、この断面逆台形状の落ち込みは築垣ではなく、築垣崩壊後に掘られた内溝SD29であることが明らかとなった。



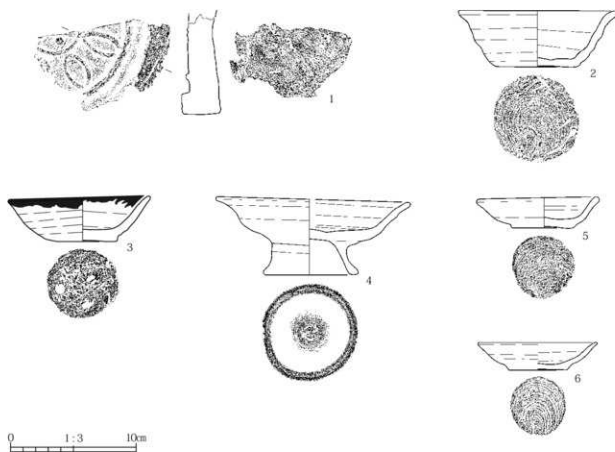
第21図 42-9, 10トレンチ平面・断面図

② S J 63

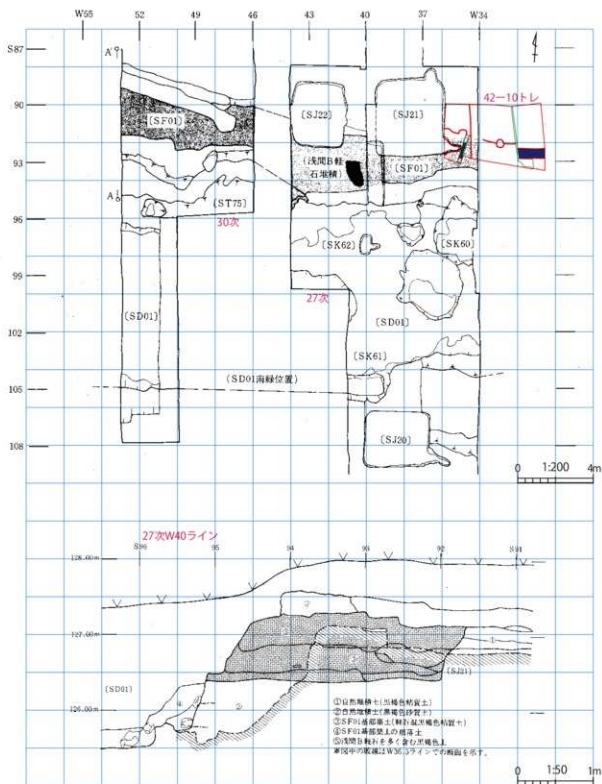
西辺のみ確認され、北・東・南辺は調査区外へと続く。出土土器(第25図9)から、11世紀前半の所産と判断される。



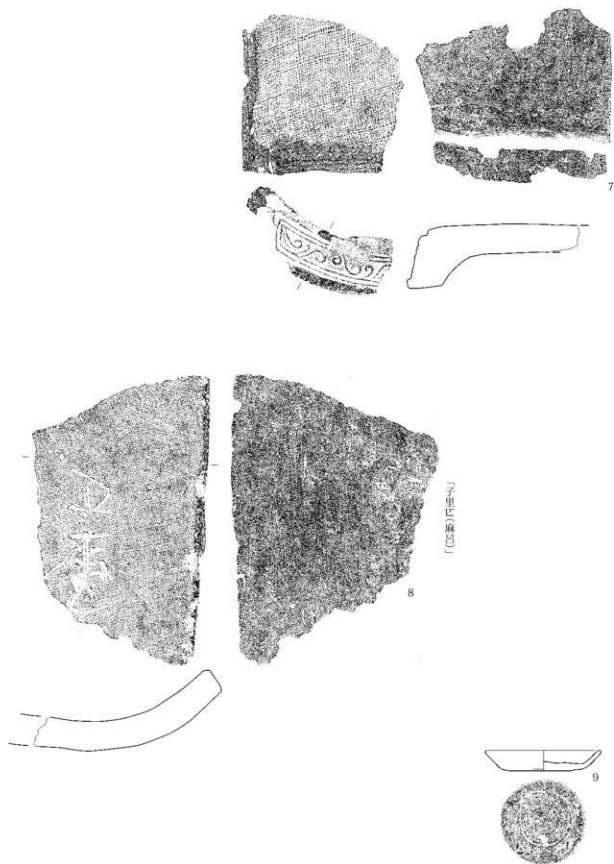
第22図 南辺西部トレンチ平面図



第23図 SD29 出土遺物



第24図 第1期27次調査区平面・断面図



第25図 42-10 トレンチ出土遺物

3 伽藍地東辺部

(1) 41-2, 3 トレンチ (第 26～28 図、PL.12, 13, 21)

東大門及び東辺区画施設の確認を行うため、上野国分尼寺跡へ向かう道の南側に 41-2、北側に 41-3 トレンチを設定した。41-2 トレンチは 3 棟並ぶビニールハウス内での調査であり、北から北・中・南と呼称した。

① 東大門

礎石や根石、掘込地業等、東大門に関連する遺構は全く確認されなかった。表土直下で漸移層(VI 層)ないし基盤層の黄褐色土(VII 層)となり、確認面レベルは 41-2 北トレンチ、41-3 トレンチともに 128.1 m 程を測る。隣接する現道下で、平成 24 年度に確認した原位置と考えられる礎石(第 26 図礎石 2)の底面レベルが 128.1 m 程であり、これと同レベルである。東大門の構造は判然としないが、原位置の礎石直下は基盤層の黄褐色土(VII 層)であり、掘込地業を行っている様子が認められないことから、今回のトレンチでも確認できなかったと考えたい。

② SD 3 1

41-2 北トレンチの南端 N8.77 を北端として南へ伸び、41-2 南トレンチを越えてさらに南へと伸びている。現状で長さ 11.85 m、最大幅は 2.2 m だが東縁を SK138 に壊されているため、もう少し大きい規模と判断される。深さは 40cm を測る。方位軸はほぼグリッドライン(W-4°-N)に沿っており、現道に比し北に向けて東に振れている。中トレンチにおいて一部掘り下げを行ったが、土器類・瓦は全く出土しなかった。

③ SK 1 3 8

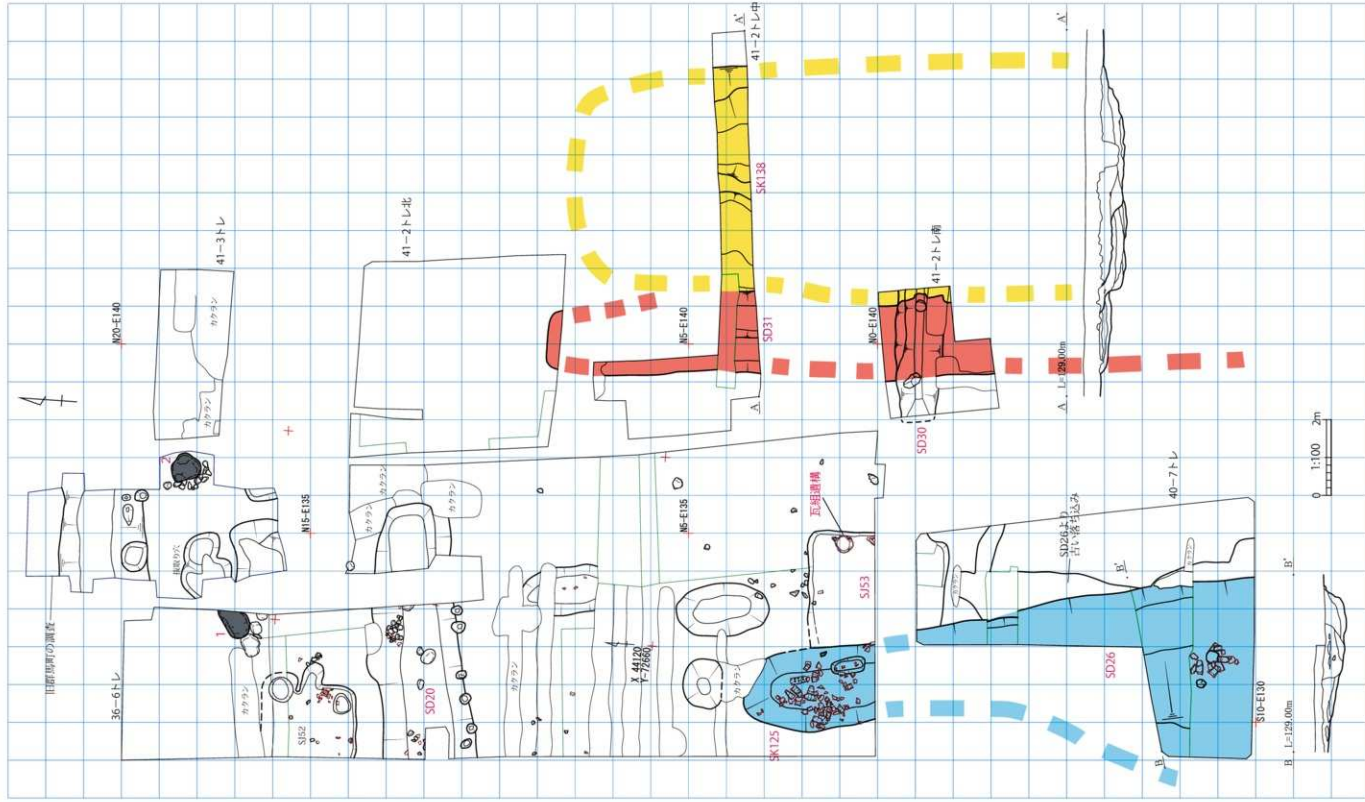
SD31 東縁を壊して東側に掘られている。41-2 中・南トレンチで確認されたが、北トレンチでは確認されなかった。東西幅 6.5 m、深さ 70cm 程を測る。南北規模は現状で 6 m ある。土層断面観察から、一度掘り直しされたことが確認できる。古期の埋土底面近くから、9 世紀前半期の須恵器椀・坏(第 28 図 2, 3)が出土している。この土坑は、その形状と規模から土採り穴と推定される。

④ SD 3 0

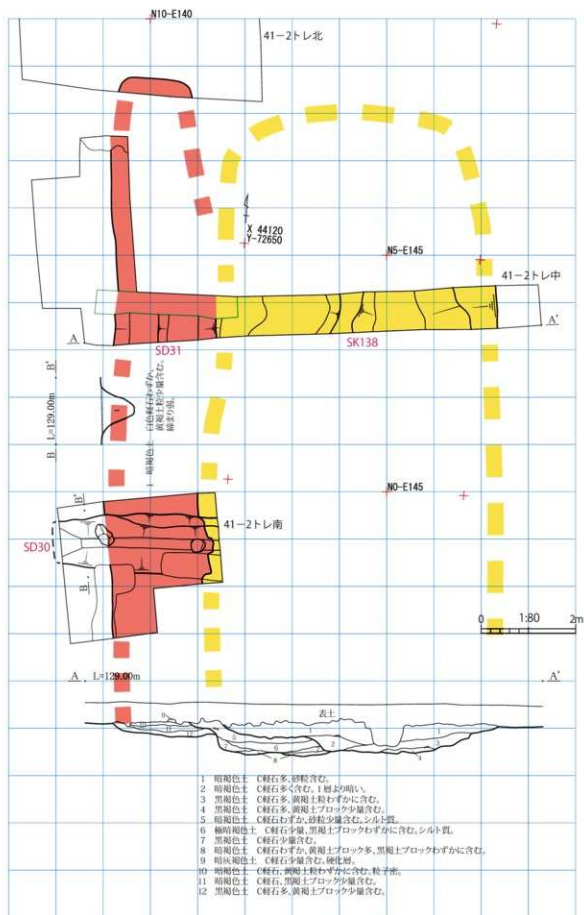
41-2 南トレンチで確認された東西方向の溝である。中世以降の所産と考えられ、SD31・SK138 を掘り込んでいる。幅 1.2 m・深さ 70cm 程で、断面は V 字状を呈す。埋土上位からは礎石状の石が検出された。

⑤ その他の遺構

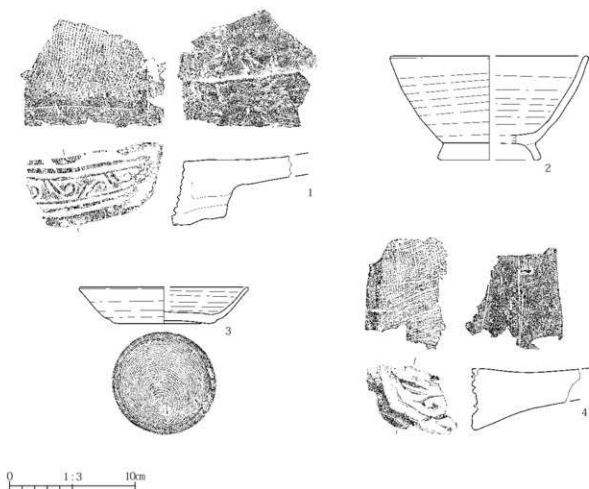
伽藍地東辺の区画施設として、築垣や掘立柱塼の柱穴の検出を試みたが、痕跡は確認できなかった。平成 24 年度に 36-6 トレンチで現道下を調査し、さらに今回はこれに接する東側の調査を行ったが、区画施設の痕跡は確認できなかったわけである。築垣は後世に削平されて消滅したとしても、掘立柱塼の柱穴は検出されるレベルであることから、南辺で確認されたような掘立柱塼は東辺には廻っていなかったと考えざるを得ない。



第26図 東大門地区平面・断面図



第27図 41-2トレンチ平面・断面図

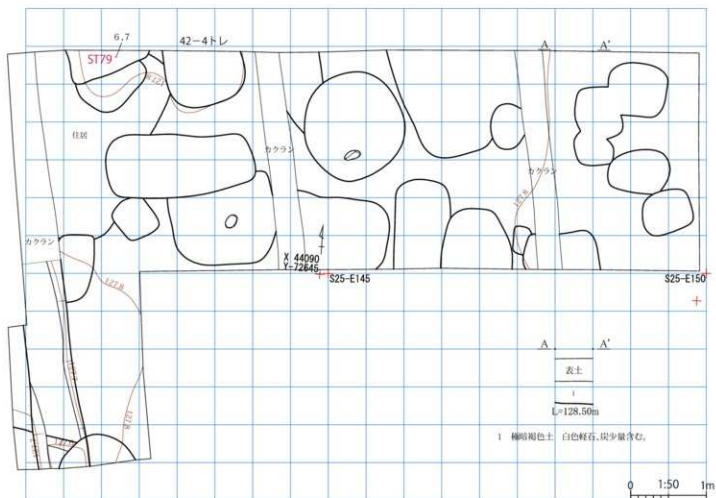
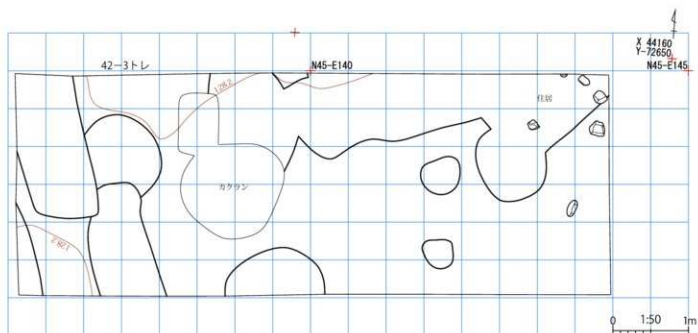


第28図 41-2, 3トレンチ出土遺物
(1～3: 41-2トレンチ中SK138 4: 41-3トレンチ表土)

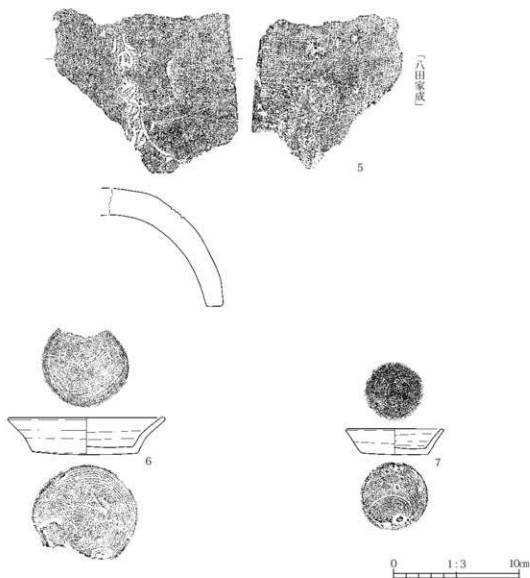
(2) 42-3, 4トレンチ(第29, 30図, PL.14, 21)

平成30年度41-2トレンチで確認されたSD31がさらに南北に伸びるかを確認するため、北部に42-3、南部に42-4トレンチを設定して令和元年度に調査を実施した。結果として溝の続きは検出されず、また国分寺存続期と考えられる遺構も衰退期と考えられる竪穴住居2棟以外は全く確認できなかった。

42-3, 4トレンチともに、表土直下に自然堆積とは捉えられない極暗褐色土層が20～30cm程の厚さで確認された。この極暗褐色土層上面では遺構確認が困難であったため、さらに地山である漸移層(VI層)ないし基盤層の黄褐色土(VII層)上面まで掘り下げを行い、遺構の有無を確認した。42-3トレンチの確認面レベルは128.2m程、42-4トレンチの確認面レベルは127.8m程であり、SD31が存在しているとすれば確認できるレベルであると考えられる。第29図のとおり、さまざまな落ち込みが確認されたが、多くは中世の所産と考えられたため掘削は行わず、平面のみの確認にとどめた。42-4トレンチST79は、確認面で精査している過程において中世皿2枚(第30図6, 7)が重なって出土したため中世墓塚と判断したもので、これ以外の落ち込みも同様の墓塚が多くあると考えられる。42-3トレンチ北東隅、42-4トレンチ北西隅では竪穴住居と考えられる落ち込みが確認されたが、表土層下の極暗褐色土層を掘り下げる過程でいずれも羽釜の大・小破片が複数確認されたため、国分寺衰退期の所産と判断された。



第29図 42-3,4トレンチ平面・断面図



第30図 42-3, 4トレンチ出土遺物
(5:42-3トレンチ黒褐色土層 6, 7:42-4トレンチST79)

(3) 42-5トレンチ(第31図、PL.14, 21)

42-5トレンチは東辺南端部、現道のすぐ東側に設定した。この場所には、現道に沿って若干の高まりがあり、築垣ないし土塁の痕跡が考えられたため、その確認を行った。北トレンチの表土層を除去したところAs-B混土層(Ⅱ層)の堆積が確認され、さらにⅡ層を除去すると自然堆積とは思えられない暗褐色土層が確認された。この暗褐色土層上面では遺構確認が困難であったため、さらに地山である基盤層の黄褐色土(Ⅶ層)上面まで掘り下げたところ、土坑(SK141)を確認した。SK141は柱穴の可能性が考えられたため、これに対応する土坑を確認すべく南トレンチを設定して調査を行ったが、土坑は確認されなかった。

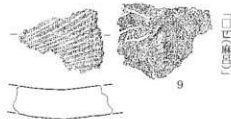
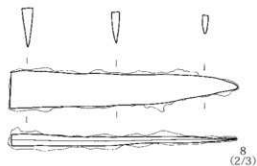
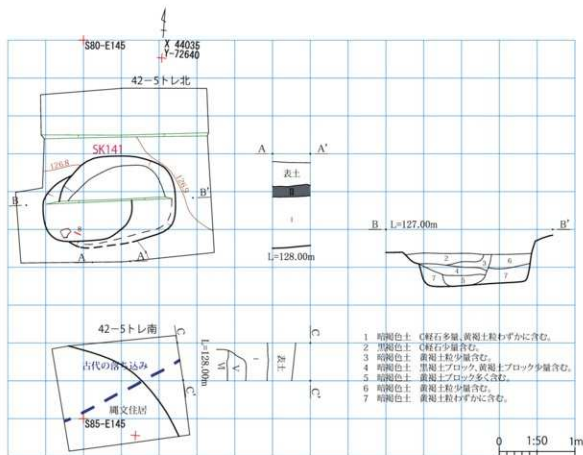
①SK141

東西方向に長軸をとる楕円形を呈す。長軸153cm、短軸117cm、深さは現状で60cmを測る。西半部にひとまわり小さな同軸の土坑が重なっている(SK141新)。その規模は長軸118cm、短軸86cmであり、土層断面観察から柱抜き痕の可能性も考えられよう。この土坑の時期は、As-B混土層(Ⅱ層)の下位から検出されたこと、SK141新の埋土に瓦片を含むことから、国分寺存続期の所

産と考えて間違いないと思われるが、性格については不明である。SK141 新の埋土からは、瓦片のほかに刀子状鉄製品(第 31 図 8)が出土している。

②その他の遺構

当初、築垣ないし土塁を確認するために調査を行ったが、盛土の痕跡は全く認められず、逆に低い場所に堆積すべき As-B 混土層(Ⅱ層)が確認された。南トレンチ断面 C を見ると、As-B 混土層(Ⅱ層)の堆積が認められないうえ、北に向けて地山が掘り込まれている状況が確認できた。このことから、南トレンチのほぼ中央を南端とする南北方向の溝が存在する可能性が考えられる。北トレンチ全体がその溝の内部であるがために、As-B 混土層(Ⅱ層)が堆積していると考えるのが妥当であろう。



0 1:3 10m

第 31 図 42-5 トレンチ平面・断面図、出土遺物

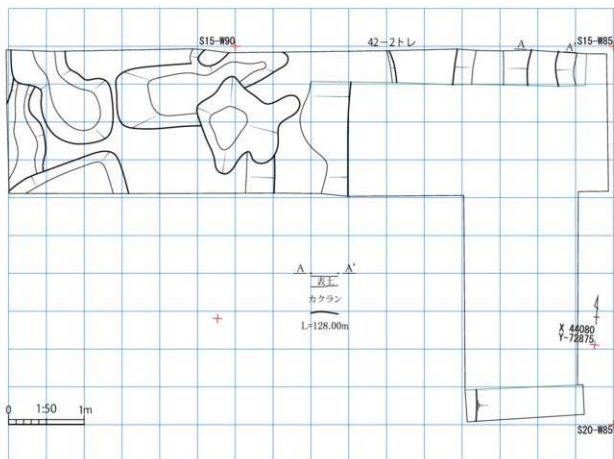
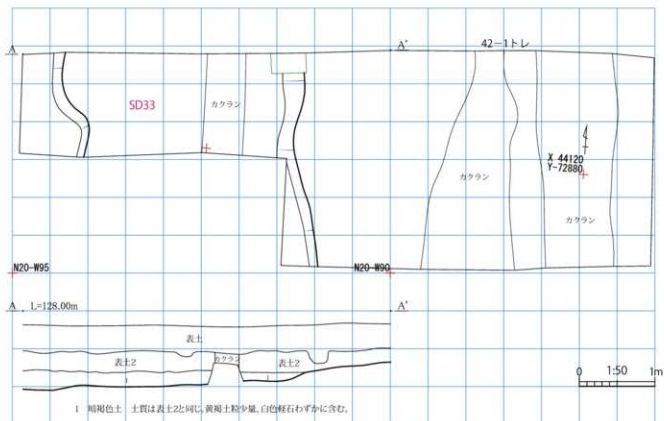
4 伽藍地西辺部

(1) 42-1, 2 トレンチ(第 32 図、PL.14)

平成 30 年度 41-2 トレンチの調査において、外郭溝の可能性のある溝(SD31)と土採り穴と考えられる大型土坑(SK138)が検出されたため、西辺にも同様の遺構が存在する可能性があるとして、42-1, 2 トレンチを設定して調査を実施した。42-1 トレンチは西大門推定地の外側、42-2 トレンチは西辺南部にあたる。結果として、両トレンチとも、国分寺に関連する遺構は全く検出されなかった。

42-1 トレンチは表土層が厚く、確認面レベル 127.3 m 程で黄褐色土の基盤層(VII層)となった。現道を挟んで東側の第 2 期 40-1 トレンチでの確認面レベルは 128.3 m であり、これに比べ 1 m 低い。仮に遺構が存在していたとしても、削られてしまっている可能性が高い。SD33 は幅広の溝状遺構で、表土層と土質がほぼ同じであるため近世以降の所産と考えられる。

42-2 トレンチは 42-1 トレンチほど確認面レベルは低くなかったが、トレンチ全面にわたり攪乱が及んでいた。トレンチ西半部で攪乱下層の遺構が認められるか掘り下げたが、遺構は検出されなかった。第 32 図に記載された落ち込みはすべて攪乱である。東半部についても、南北壁面際にサブトレンチを設定して外郭溝の存否を確認したが、溝は検出されなかった。



第32図 42-1, 2トレンチ平面・断面図

5 遺物観察表

加藍地南辺東部(第10～14, 17～19区, PL.15～19)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	平瓦	42.6 SD01 底上7cm	挟端部左 隅1/6	厚さ2.0～2.7	砂粒	還元焼/灰白 (5Y8/1)	一枚作りか。凹面糸切り痕、布目、一部ナデ、挟端縁ヨコケズリ、側端縁タテケズリ。凸面布目タテ調印をヨコナデで消す。布目付着、挟端縁・側端縁取りのケズリ。	
2	須恵器 壺	42.6 SD01 底上2cm	胴下位～ 底部	底径7.0	砂粒、白色粒	還元焼/灰	ロケロ成形。底面ヘラケズリ。	8世紀
3	土師器 坏	42.6 SK139 染垣下	坏部破片		砂粒	酸化焼/橙	外面口縁部横ナデ。内面ナデ後、履位の暗文。	8世紀後半
4	軒丸瓦 B201a	42.6 SD01 SK139	右下部小 破片		砂粒	やや酸化焼気味/表面 黒色処理。表面灰 (10Y4/1)。断面にぶ い黄粒(10YR6/4)	瓦当裏面強いナデ。瓦当側面ヨコナデ。	
5	軒丸瓦 B202bか	42.6 SK139	上部小破 片		砂粒、赤色・白 色粒子	還元焼。断面は酸 化焼気味/表面灰白 (2.5Y8/1)断面にぶ い黄粒(7.5YR7/4)	履置き型一本作り。瓦当裏面無紋り布目。	
6	軒丸瓦 B203か	42.6 SK139	右側小破 片		砂粒やや多。白 色粒子目立つ	還元焼/灰(7.5Y6/1)	履置き型一本作り。瓦当裏面無紋り布目。	
7	軒平瓦 Q001	42.6 SK139	左端部 1/4	瓦当幅4.3	砂粒。白色粒子 目立つ	還元焼。断面酸化焼 /表面灰(10Y6/1)断 面縁(5YR6/6)	不明瞭な縁がある曲線部。凹面糸切り痕、布目、広端縁ヨコナデ、側端縁取り状タテケズリ。凸面タテナデ後格子叩き、額付近はヨコナデ。	
8	平瓦	42.6 SK139	広端左隅 1/4	厚さ2.0	砂粒。白色粒子 目立つ	還元焼/灰(N5/0)	凹面布目、一部ナデ消し。広端縁ヨコケズリ、側端縁取り状タテケズリ。凸面タテナデ。	凸面にへろ書き「足」
9	平瓦	42.6 SK139	中央部小 破片	厚さ1.1	砂粒。白色粒子 目立つ	還元焼/灰(10Y5/1)	一枚作りか。凹面布目。凸面ナデ後格子叩き。	凸面に叩き「佐位」C類
10	平瓦	42.6 SK139	広端部小 破片	厚さ1.6	砂粒	還元焼/灰(5Y6/1)	凹面布目を粗くナデ消す。広端縁ヨコ削り、凸面ナメナデ後叩き。広端部ヨコナデ。	凸面に叩き「重A」類
11	向阿右安 山岩切石	42.6 SK139		現存長18.6 現(幅)15.6 厚さ12.0				
12	軒平瓦 NH301 か	42.6 SK140	右端部 1/3		砂粒、白色粒子、 小礫(φ20mm以下)	還元焼/灰(10Y6/1)	顎は曲線顎状。凹面布目、広端縁ヨコケズリ、側端縁取り状タテケズリ。凸面ヨコナデ、側端縁取り状タテケズリ、一部タテ調印が残る。	
13	須恵器 甗	42.6 SK140 底直		口径13.7 底径5.3 器高3.9	砂粒	還元焼/灰	ロケロ成形。左回転。底部回転糸切り。	10世紀前半 油煙付着
14	須恵器 甗	42.6 SK140 底上35cm	完形	口径10.0 底径5.2 器高3.9	砂粒	還元焼/灰白	ロケロ成形。左回転。底部回転糸切り。	10世紀中葉
15	須恵器 甗	42.6 SK140 底上44cm	完形	口径10.1 底径6.0 器高3.4	砂粒	酸化焼/にぶい焼	ロケロ成形。左回転。底部回転糸切り。	10世紀中葉 内面黒付着
16	軒丸瓦 B104	42.6 S90E62 周	左上部小 破片	丸瓦厚1.6～ 2.3	砂粒	還元焼。断面酸化 焼気味/表面灰白 (5Y8/1)断面黄黄粒 (10YR8/3)	溝を掘って丸瓦を差し込む。丸瓦凸面先端は少し削る。接合用粘土は少ない。瓦当裏面ナデ。丸瓦部凹面布目、側端縁タテケズリ。凸面タテナデ。	
17	軒丸瓦 B201a	42.6 S101E62 表上	右下部 1/4		砂粒。黒色・白 色粒子目立つ	還元焼/灰(5Y6/1)	横置き型一本作りか。周縁上面凹面方向ケズリ。瓦当裏面ナメ・ヨコナデ。側面凹面方向ナデ。	
18	軒丸瓦 B206	42.6 S101E62 表上	中央部 3/4	中房径3.4	砂粒、粗砂粒、 小礫(φ6mm以 下)多	還元焼/灰白 (2.5Y8/2)	丸瓦接合溝が上端に残る。瓦当側面ヨコケズリ。瓦当裏面粗いヨコ(一部タテ)ナデ。	
19	軒平瓦 P001	42.6 S101E62 周	中央部 1/3	瓦当幅4.2	砂粒。白色粒子 目立つ	酸化焼気味/瓦当 面～凹面にぶい黄 黄粒(10YR7/4)凸面・断 面灰黄(7.5YR5/2)	ごく短い段のある曲線部。凹面タテナデ。瓦当近ヨコナデ。広端縁ヨコケズリ。凸面ヨコナデ。ナメ調印が一部に残る。	
20	軒平瓦 P102か	42.6 S105E62 表上	中央部 1/3	瓦当幅3.5 顎面長4.3	砂粒。白色粒子 目立つ	酸化焼気味/灰白 (2.5Y8/2)	段部。凹面ヨコナデ。凸面ヨコナデ。顎面ヨコケズリ。	
21	平瓦	42.6 北狭張区 表上	右側端部 小破片	厚さ1.5～1.9	砂粒、白色小礫 (φ5mm以下)	還元焼/灰(N5/0)	凹面布目を粗くタテナデで消す。凸面タテナデ。側端縁ヨコナデ。	凸面に押印「〇」
22	平瓦	42.7 染川部 盛土上	中央部小 破片	厚さ1.5～1.8	砂粒	還元焼/灰白 (10Y7/1)	凹面ヨコナデ後タテナデ。凸面糸切り痕、2方向のナメ調印。	
23	軒丸瓦 E103	42.7 染知内渠 内	花弁部小 破片		砂粒、白色小礫 (φ7mm以下)	還元焼/灰(7.5Y6/1)	上端は丸瓦接合溝が残る。瓦当部は2枚以上の粘土からなるか。瓦当裏面はナデ。	

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
24	軒平瓦 P012	42.7 SD27	左端部小破片	瓦当幅 4.8	砂粒、粗砂粒や やど	還元焼 / 灰(5Y6/1)	ほぼ種のない曲線縁。凹面布目、瓦当近くヨコケズリ。側縁縁タテタテズリ。凸面タテタテズリ。	
25	丸瓦	42.7 SD27	狭端左端小破片	厚さ 1.2 ~ 2.2	砂粒やや多	還元焼 / 凸面灰(10Y5/1)凹面暗灰濁(2.5Y5/2)	無段式丸瓦か。凹面布目、側縁縁幅狭い面取り状タテタテズリ。凸面タテ・ナナメナデ。側縁面・狭端面ヨコケズリ。	凹面にへら書き「代」
26	平瓦	42.7 SD27	狭端左端小破片	厚さ 1.5 ~ 1.8	砂粒、白色・赤色 粒子	還元焼、断面酸化焼気味 / 表面灰(7.5Y6/1)一部黒色。断面にぶい堀(7.5YR5/3)	一枚作り。凹面糸切り痕、布目、側縁縁・狭端縁縁幅狭い面取りのタテタテズリ。凸面タテ・ナナメナデ、側縁縁幅狭い面取りのタテタテズリ。	凸面にへら書き「山子口(横力)」
27	平瓦	42.7 SD27	広端左端1/6	厚さ 1.8	砂粒、白色小礫(φ10mm以下)目立つ	還元焼 / 表面灰(N4/O)断面中心部灰濁(7.5YR5/2)	一枚作り。凹面糸切り痕、布目、側縁縁・狭端縁面取りのタテタテズリ。凸面タテタテズリ。	凸面にへら書き「山子口」
28	緑釉陶器 皿	42.7 SD27	底部破片	高台径(7.0)	砂粒わずか。緻密な胎土	還元焼 / 釉調は濃緑、断面灰	ケズリ出しによる蛇の目状の高台。内面ミカキ。	9世紀後半 京都産
29	須恵器 碗	42.7 SD27	口縁~底部	口径(12.8) 底径 6.6 器高 4.9	砂粒	還元焼 / 灰	ロクロ成形。右回転。底部回転糸切り後、高台貼付。	9世紀末
30	須恵器 碗	42.7 SD27	完形	口径 11.8 底径 6.0 器高 3.7	砂粒	酸化焼 / 橙	ロクロ成形。右回転。底部回転糸切り。	10世紀中葉
31	軒平瓦 NH301	42.7 築垣南 側	中央部 1/3	瓦当幅 3.9	砂粒多、白色小礫(φ17mm以下)目立つ	還元焼 / 表面灰(10Y5/1)断面灰濁(2.5Y6/2)	瓦当はややくなる。桶巻作りか。凹面布目をヨコナデで消す。凸面粗いナナメケズリ後ヨコナデ。	凸面に朱付着
32	軒平瓦 P006	42.7 築垣北 B 1段上	左側 1/2	瓦当幅 4.6 顎面長 4.3	砂粒、白色粒子 目立つ	還元焼 / 表面暗オリーブ灰(5GY4/1)断面灰白(7.5Y7/1)	段縁。平瓦部は一枚作り。凹面布目、広端縁ヨコケズリ。側縁縁幅狭い面取り状タテタテズリ。凸面タテナデ。顎面ヨコケズリ。	
33	平瓦	42.7 築垣南 側	狭端右端小破片	厚さ 1.8 ~ 2.8	砂粒、赤色・白色 粒子目立つ	酸化焼 / にぶい橙(5YR6/3)	一枚作り。凹面布目、側縁縁幅狭い面取り状タテタテズリ。凸面タテ・ナナメナデ、側縁縁幅狭い面取りのタテタテズリ。	凹面にへら書き「子口」
34	瓦塔	42.7 築垣北 表上	小破片		砂粒	酸化焼気味 / 表面橙、断面灰白	屋根の部位。半截竹管状工具による平行線を施す。	
35	向阿石安 山石切石	42.7 SD12		現存長 18.0 現存幅 20.4 厚さ 13.0				

加藤地南辺西部(第23, 25区, PL20)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 E102	42.9 SD29 築垣東 側	右下部 1/4		砂粒やや多	還元焼 / 灰白(5Y7/1)	周縁上面門渡方向ケズリ。瓦当面ヨコケズリ。裏面粗いナナメナデ。	
2	須恵器 碗	42.9 SD29 底上 27cm	完形	口径 12.2 底径 6.3 器高 4.5	粗砂粒多	還元焼 / 灰	ロクロ成形。右回転。底部回転糸切り。	10世紀前半
3	須恵器 碗	42.9 SD29 底上 9cm	完形	口径 11.0 底径 4.7 器高 3.7	砂粒	還元焼 / 暗灰	ロクロ成形。右回転。底部回転糸切り。	10世紀中葉 口縁部に油煙付着
4	須恵器 碗	42.9 SD29 底上 37cm	ほぼ完形	口径(15.1) 底径 7.4 器高 6.3	砂粒	酸化焼 / 橙	脚高。ロクロ成形。右回転。底部回転糸切り後、高台貼付。	10世紀後半
5	須恵器 小皿	42.9 SD29 底上 81cm	完形	口径 9.2 底径 4.6 器高 2.5	砂粒	酸化焼気味 / 淡黄	ロクロ成形。右回転。底部回転糸切り。	10世紀末~ 11世紀
6	須恵器 小皿	42.9 SD29 底上 44cm	完形	口径 9.3 底径 4.6 器高 2.2	砂粒	酸化焼 / 橙	ロクロ成形。左回転。底部回転糸切り。	11世紀
7	軒平瓦 P004	42.9 S90W20 表上	左端部 2/5	瓦当幅 4.8 顎面長 2.9	砂粒・粗砂粒や やど。白色粒子 目立つ	還元焼 / 灰(10Y7/1)	平瓦部は一枚作り。凹面布目、広端縁ヨコケズリ。瓦当近くはヨコケズリ。側縁縁幅狭い面取り状タテタテズリ。凸面ヨコナデ。側縁縁面取り状タテタテズリ。	
8	平瓦	42.10 SJ21 カマド	右側端部 1/4	厚さ 1.9 ~ 2.4	粗砂粒多	還元焼 / 灰(5Y6/1)	一枚作り。凹面糸切り痕、布目、側縁縁面取りのタテタテズリ。凸面タテナデ。側縁縁幅狭い面取りのタテタテズリ。側縁縁粗いタテナデ。	凹面にへら書き「子口」
9	須恵器 小皿	42.10 SJ63	完形	口径 8.9 底径 6.4 器高 1.6	砂粒	酸化焼気味 / 灰赤	ロクロ成形。底部回転糸切り。	11世紀前半

Ⅲ 発掘調査の成果

加藍地東辺(第 28, 30, 31 図、PL21)

No.	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量・g	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	軒平瓦	41-2 中 SK138	右端部 1/3	瓦当幅 4.9 顎面長 3.5 ~ 4.2	砂粒。白色粒子 目立つ	還元焼 / 凹面灰 (10Y5/1)凸面・断面 灰(5Y6/1)	段頸。顎は粘土貼り付け。平瓦部は一枚作り。 凹面糸切り痕、布目、広端縁ヨコズリ。側 端縁タテズリ。凸面ヨコナデ。一部タテ補 甲きが残る。	
2	須恵器 碗	41-2 中 SK138	口縁～底 部 1/3	口径(15.3) 底径(7.3) 器高 8.2	砂粒	還元焼 / 灰白	ロクロ成形。右回転。底部回転糸切り後。高 台貼付。	9 世紀前半
3	須恵器 坏	41-2 中 SK138	口縁～底 部 1/3	口径(13.2) 底径 7.2 器高 2.9	砂粒	還元焼 / 灰白	ロクロ成形。右回転。底部回転糸切り。	9 世紀前半
4	軒平瓦 P301	41.3 表上	左端部小 破片		砂粒	還元焼 / 灰白 (5Y7/1)～灰(N5/0)	曲線顎。凹面糸切り痕、布目、側端縁面取り 状タテズリ。凸面タテナデ。側端面ヨコ ズリ・ナデ。	凸面に朱付着
5	丸瓦	42.3 N42E140 黒曜土	広端右隅 小破片	厚さ 1.7 ~ 2.2	砂粒多。赤色粒 子目立つ	酸化焼 / 凸面にふい い橙(10YR6/3)～橙 (5YR6/6)凹面灰黄褐 (10YR5/2)断面にふ い橙(5YR6/4)	凹面布目。一部ナメナデ。側端縁・広端縁 幅狭いケズリ。凸面タテナデ。広端面ヨコ ズリ。側端面タテズリ。	凸面にへう書 き「八田家成」
6	在地系土器 皿	42.4 ST79	ほぼ完形	口径 12.0 底径 8.2 器高 3.0	砂粒	酸化焼 / にふい橙	体部中央から加曲し、直線的に開く。見込み 周縁窪む。底部左回転糸切り無調整か。見込 み指ナデ。二次焼成を受けたか。	15 世紀後半～ 16 世紀前半
7	在地系土器 皿	42.4 ST79	ほぼ完形	口径 7.5 底径 5.1 器高 2.1	砂粒	酸化焼 / にふい橙	小型皿。体部から口縁部直線的に開く。底部 左回転糸切り無調整。	15 世紀後半～ 16 世紀前半
8	刀子状 鉄製品	42.5 北 SK141	刃部	全長 9.1 刃長 9.1 刃元幅 1.4 刃元厚 0.45 重さ 16.7			細身で先端がやや実り気味。冴と思われる部 位は無し、あるいは刃部を切断している可能 性がある。	
9	平瓦	42.5 北 暗曜土	中央部小 破片	厚さ 2.3	砂粒多。白色粒 子目立つ	還元焼 / 灰(7.5Y4/1)	凹面糸切り痕、布目。凸面タテナデ。	凸面にへう書 き「□□(麻呂)

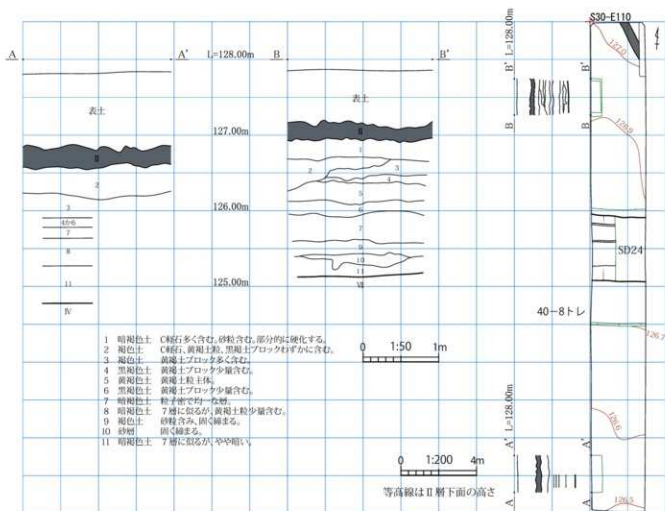
IV まとめ

1 上野国分寺の旧地形について

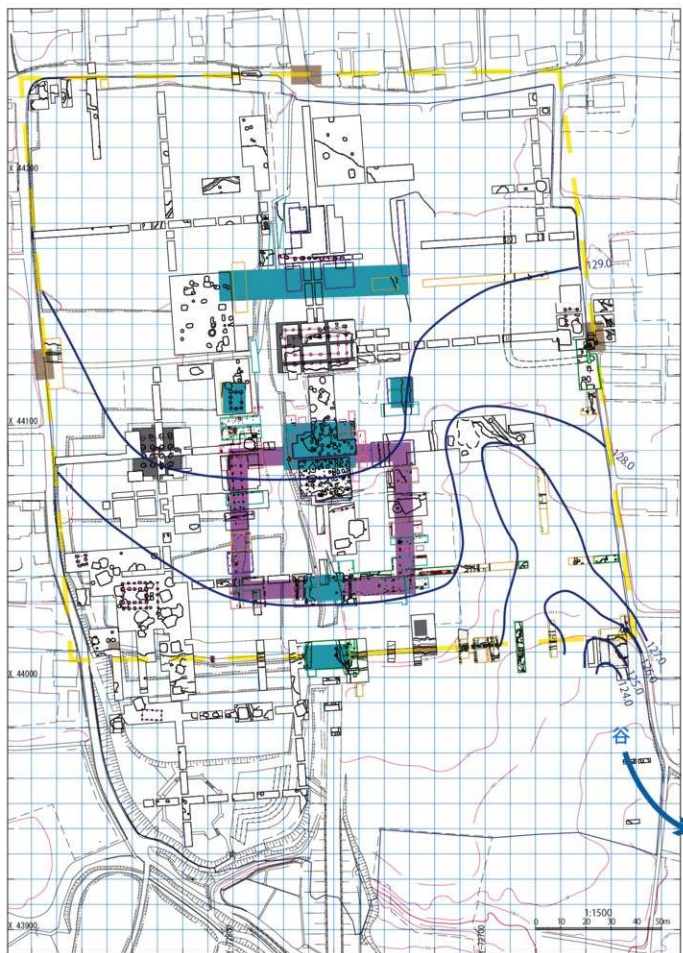
平成 28 年度第 40 次調査において、伽藍地南東部は国分寺当時から谷地であったことを確認した。その調査成果に基づき、『総括報告書』では上野国分寺の旧地形を第 34 図のとおり推定復元した。しかし、今回の追加調査成果により再検討を行い、第 35 図のとおり見解を改めることとする。

その理由は第 1 に、『総括報告書』ではレベルの基準を As-B 混土層(Ⅱ層)直下面としたことである。As-B は天仁元年(1108)の浅間山噴火により降下したテフラであり、降下後の攪拌によって混土化したもので、国分寺創建時とは 300 年以上の時期の隔たりがある。今回の追加調査でも、42-6 トレンチや 41-1、42-9 トレンチにおいて、SD27 や SD29 が埋まりきった後も地表面を高くするほどの土層堆積が確認されており、『総括報告書』での基準が不適当であったことが明らかとなった。

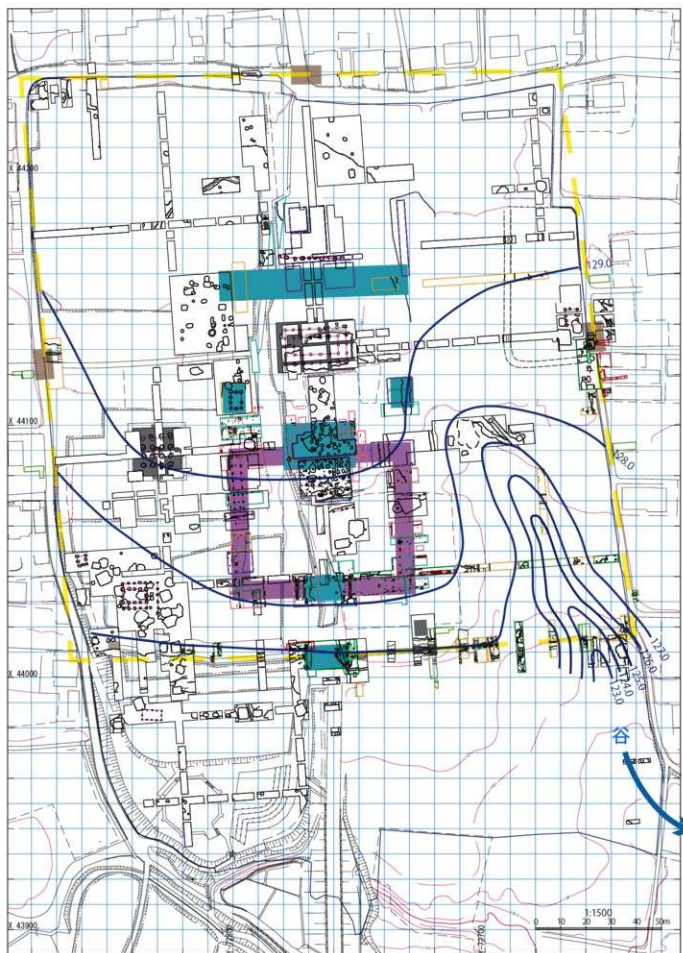
第 2 の理由として、谷地部の堆積層の理解がある。第 2 期 40-8 トレンチでは、As-B 混土層(Ⅱ層)の下層に 2 m 程の堆積土が認められ(第 33 図)、『総括報告書』ではこれらを人為的に埋めたものと判断した。しかし、第 33 図断面 A、B を再検討してみると、少なくとも 7、8、11 層のブロックを含まない、粒子が密で均一な層や 10 層の砂層などは、人為的埋土ではなく自然堆積と判断すべきものであったと考えるに至った。対比したのは、第 8 図断面 A の 19 層、同図断面 C の 4 層、第 15 図断面 A の 7、8 層である。これらの層は、黄褐色土ブロックを斑状に含んでいることが共通し、人為的



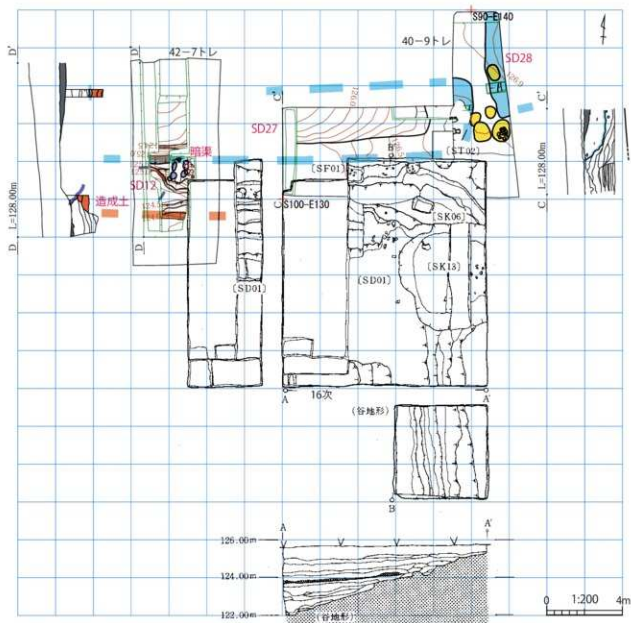
第 33 図 40-8 トレンチ平面・断面図(『総括報告書』より、一部改変)



第34図 『総括報告書』における創建時の旧地形復元図



第35図 追加調査成果に基づく創建時の旧地形復元図

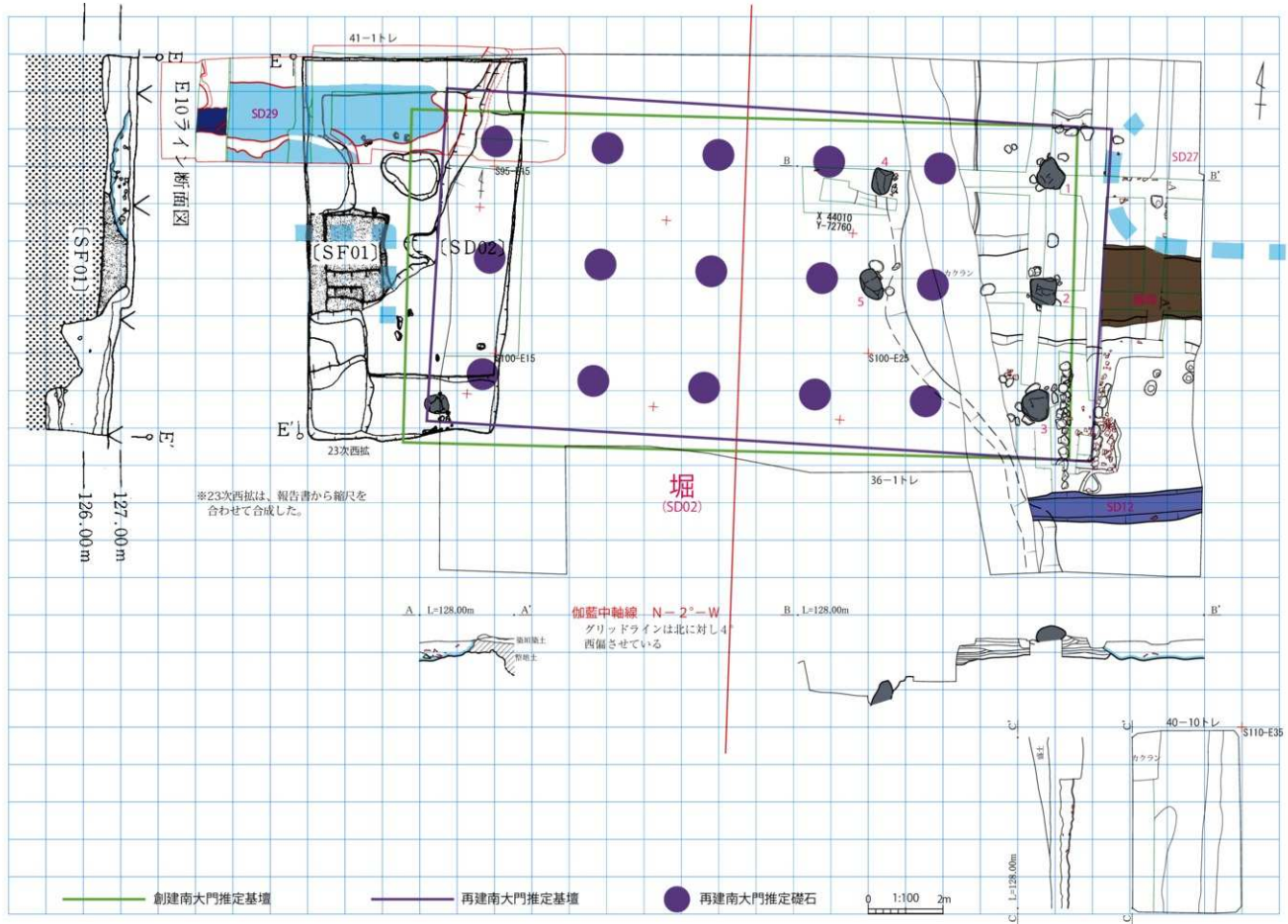


第36図 谷地部における築垣の状況

埋土と捉えられるものである。また、第15図断面Aの16～18層は、明らかに地山である黒褐色土や黄褐色土を選んで埋めていることがうかがえる。このことから、第2期40-8トレンチの地山であるIV層直上には自然堆積による埋土層が重なっていることになり、IV層上面が国分寺創建時の状態であるといえる。谷地の造成については、築垣部分にのみ築垣を造成するため蒲鉾状に埋土造成しているが、それ以外の場所については何ら行っていなかったと判断したい。築垣部分についても、42-7トレンチの調査結果から1～1.5m程の厚さの造成であることが確認されている。何も施設を置かない南東部の谷地に、多大な労力をかけて造成を行うことはしなかったであろう。

2 南大門の構造について

南大門の構造については、『総括報告書』において10尺等間程の五間門であったと推定した。その根拠は、第2期調査において伽藍造営の基準となる伽藍中軸線が判明し、検出されていた創建期の乱石積基壇東縁線を伽藍中軸線で折り返すと、基壇の東西規模が60尺となったことによる(第37図)。



第37図 南大門地区平面・断面図

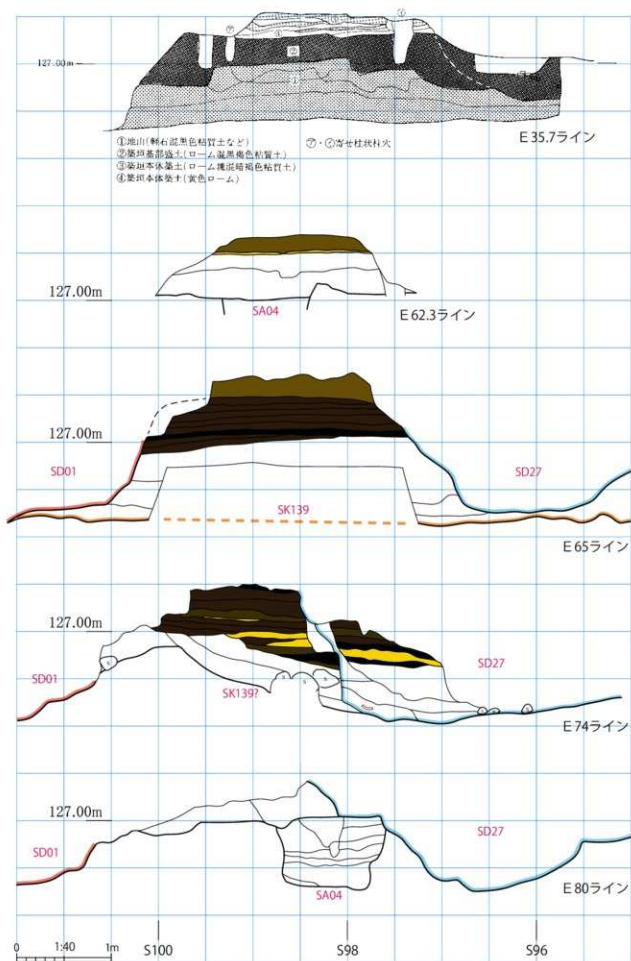
東辺の礎石列(1~3)は再建期的のものであり、基壇を含め創建期に対しやや東にずれている。礎石4, 5は後世の堀(SD02)に転落したもので、その状況から本来の位置は現状より東側にあったことは確実である。これを八脚門とすると、中央間が開き過ぎてしまい構造的に無理が生じるため、五間門と考えたわけである。なお、創建期も再建期と同規模と仮定している。

今回の追加調査では、五間門であったことを遺構から証明すること、つまり南大門北西角の掘込地業の検出を目指したが、結果としてその確認には至らなかった。しかし、南辺築垣内側に掘られた溝SD29が検出され、その東端がE13.74の位置で立ち上がり、これ以东には伸びていかないことが確認された。この意味は、南辺東部のSD27西端の状況から考えれば、この位置まで南大門の基壇が存在した証拠と考えられるであろう。

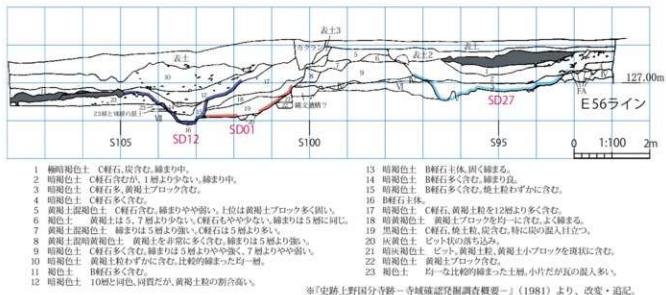
3 南辺東部の築垣について

今回の追加調査では、42-6トレンチにおいて第1期23次東調査で確認されていた築垣下部を再確認した。その形状を再検証したところ、地山面から1.5尺(45cm)程積み上げた暗褐色土を基部盛土、その上に積み上げた黄褐色土を築垣本体築土と解釈するのが妥当ではないかと判断された。『総括報告書』においては基部盛土の存在を疑問視していたが、今回の調査により基部盛土の存在が認められたため、見解を改めることとする。ここで再度、南辺東部の築垣断面をまとめ(第38, 39図、位置については第41図を参照)、築垣の検出状況について概観しておく。なお、『総括報告書』では伽藍地区画施設の変遷として、第1期：掘立柱塼→第2期：築垣→第3期：土塁+内溝の3段階を提示した。第3期土塁については、第2期築垣が崩壊した後、土を厚い単位で簡便に盛り上げた時期としている。以下の記述は、これに基づく。

- ① E62.3ライン 今回の調査した42-6トレンチE 62.3ラインでは、標高127.0m程の旧地表面(IV層上面)に1.5尺(45cm)程の高さの基部盛土を造成し、その上から築垣本体の築土を積み上げていると見られる。基部盛土は厚さ15~30cmの暗褐色土を2層積み上げ、その上に築垣本体築土として薄く明黄褐色土を、さらに厚さ17cm程の黄褐色土を積み上げている。版築といえるほどの締まりは見られない。現状で基部盛土の下端幅は2.8m、築垣築土の下端幅は1.7mを測る。
- ② E 65ライン 同じく42-6トレンチのE 65ラインでは、SK139を旧地表面レベルの標高127.0m程の高さまで埋め戻し、その上に基部盛土、築垣本体を造成している。E 62.3ラインとは異なり、基部盛土は明瞭な版築を行っている。版築は、1単元5~10cm程の厚さで8層積み上げており、高さ55cm程を測る。築垣本体築土はE 62.3ラインと同層であり、厚さは25cm程ある。
- ③ E 35.7ライン E 35.7ラインは第1期23次西調査で検出されたものである。この断面の基部盛土とされた②層が築垣下部のみにとどまらず北まで続くことから、『総括報告書』では伽藍地内の造成土として解釈したが、第38図に白線で追記したように基部盛土とSD27とで分層できると推定される。E33ラインでは分層できることが確認されており(第37図断面A)、これと同様であったであろう。この地区については第1期の報告書によれば、基部盛土は黄褐色土混黒褐色粘質土1層であり、127.0m程の旧地表面から30cm程の高さで盛っている。その上に黒色粘質土と黄褐色土混暗褐色粘質土を1単元3~5cmの厚さで版築を行い、築垣本体築土としている。築垣本体を版築により構築していることが確認される唯一の例である。築垣本体築土の下端幅は2.1mを測る。
- ④ E 74ライン 第2期40-12トレンチ拡張区で検出したもので、明瞭な版築層が確認されている。

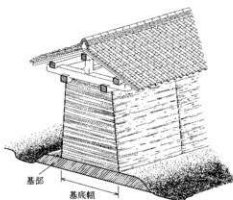


第38図 南辺築垣断面図(1)



第39図 南辺築垣断面図(2)

この版築層は、『総括報告書』では築垣本体の築土と判断したが、E 65ラインの状況と対比すれば、基部盛土と判断するのが妥当であろう。版築層下にある落ち込みはSK139と判断され、土坑の立ち上がりに近いいため自然堆積による埋没が進んでおり、その上から基部盛土の版築を行ったと考えられる。そのために旧地面レベルである127.0mより低い位置から、レンズ状堆積様の版築が認められるのであろう。なお、S98.4以北の版築層のブロックは、SD27が掘られたことにより断層状に溝に滑り落ちたものである。



第40図 築垣構造図
(文化庁文化財部記念物課(2013)
「発掘調査のてびき各種道路調査編」より)

⑤ E80ライン 同じく第2期40-12トレンチ

のE80ラインでは版築層が確認できなかったため、『総括報告書』では築垣と認識しなかったが、SA04の上位にあり、SD27に掘り込まれた南側の土層は基部盛土と判断すべきものであろう。土層の下面レベルが127.0m程であり、レベルから見ても矛盾しない。

⑥ E56ライン E56ラインは第1期1号トレンチで検出されたものだが、概報に土層注記の記載が無かったため遺構原図をあたり、今回掲載するに至った(第39図)。他の箇所と同様、127.0m程の地山面から土を積み上げている。築垣築土として第5～9層の5層が確認でき、地山面からの高さは90cm程を図る。最も高さが残存する箇所であり、E 62.3ラインを参考にすれば第7～9層が基部盛土、第5、6層が築垣本体築土に相当すると考えられる。第5層は黄褐色土ブロックを多く含む褐色土であり、36cmの厚さがある。『総括報告書』ではこの箇所を取り上げ、盛土の単位が厚いと、概報の「版築等によりつき固めることはせず、築土のしまりはそれほど強くない」との記述から、第2期築垣ではなく第3期土塁である可能性を指摘したが、今回の42-6トレンチでの築垣本体築土の状況により、その判断は難しいものとなった。

以上をまとめると、国分寺創建時の旧地表面レベルは127.0 m程であり、その上に1.5尺(45cm)程の基部盛土を造成し、その上から築垣本体の築土を積み上げていった構造であったと考えられる。基部盛土の幅は、北縁がSD27に壊されるため判然としないが、E 65ラインで築垣南側の犬走り幅が70cm程あることから、3m以上であることは間違いないだろう。ただし、その造成方法については大きな違いが指摘できる。突き固めるまではせず厚めに盛土を行う箇所と、丁寧な版築を施す箇所である。この違いは基部盛土のみならず、築垣築土にまで及ぶ。基部盛土に版築を行っている箇所は概ね下層にSK139が存在するところで、地盤を強化するために版築を施したと推測できなくもない。しかし、築垣本体築土の違いについては、どう説明すべきか判断に苦しむ。今回調査を実施した42-6トレンチでは、単位は厚く版築ではないが、黄褐色土をあえて選んで積み上げていることから、第3期土塁ではなく第2期築垣と判断した。また、第39図E56ラインのように褐色土を厚めに盛っているところもある。場所によって、造成の方法に差があったということなのだろうか。

また今回の調査では、南辺東端の谷地でも築垣造成の痕跡が確認され、暗渠も検出されている。築垣造成に際し、谷地を横断するように蒲鉾状に埋土していることが分かったが、谷地西側平坦部の旧地表面(127.0 m)と同レベルまでかさ上げすることはしていない。暗渠の底面レベルで125.0 mであり、谷地西側平坦部と比べて2 m低い。このことから南辺東部の築垣は、谷地部において弓なりに下がる形状であったことが明らかとなった。

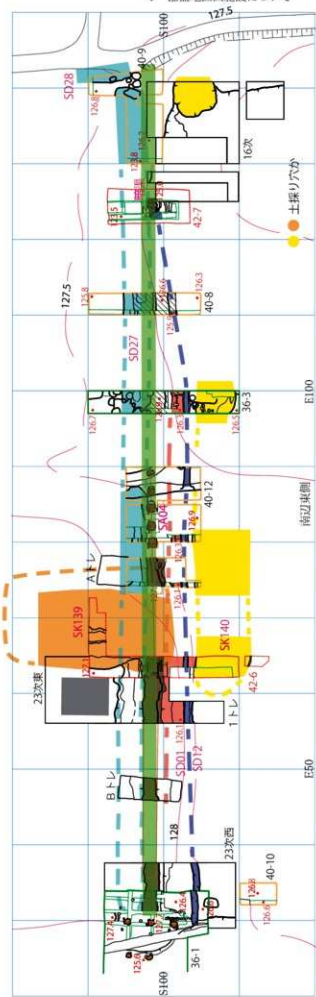
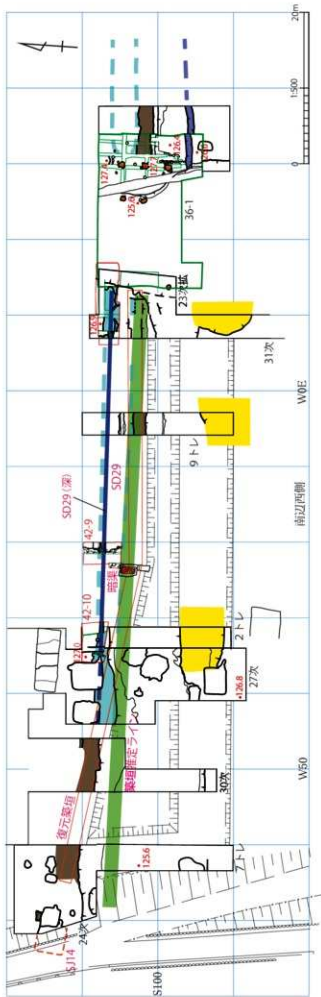
4 伽藍地区画施設について

今回の追加調査では南辺において、①SA04のP7を新たに検出したこと、②築垣本体の下部を再確認したこと、③東部の谷地で築垣の痕跡を確認したのに加え、暗渠を検出したこと、④築垣外側で築垣造成のための土採り穴と考えられる大型土坑(SK140)を検出したこと、⑤西部でSD29を検出したこと、の5点を大きな成果としてあげることができる。ここで新たな調査成果とともに、伽藍地区画施設について再度まとめてみたい。

SA04 42-6トレンチの築垣下層から柱穴1個(P7)を確認した。第2期40-12トレンチで6個(P1～P6)が確認されていたため、南辺東部において7個目の検出となる。しかし、今回確認したP7はSK139を挟んだ西にあたり、P1～P6とはラインがずれている。SK139の埋土部分から柱穴は確認できず、SK139内での柱穴の有無が課題となる。また、東辺の調査では柱穴を検出することができなかった。

SD01 築垣に沿うように掘られた外溝である。42-6トレンチの調査で、より様相が明らかになった。42-6トレンチ東壁では、築垣基部盛土の下端がS100.19の位置でこれを北縁とし、南はS104.26の位置でSK140に壊されていることが分かった。これにより、SD01の幅は4 m強であることが明らかとなった。SK140に南縁を掘り込まれていることから、SK140より前の時期に掘られた溝であると判断できる。

SK140 SD01南縁を壊して南側に掘られた大型の土坑である。南北幅は7.5 mを測る。底面は126.0 m程で平坦であり、旧地表面からの深さは1 m弱と考えられる。北壁の下半が垂直気味に掘られており、40-12トレンチや拡張区、36-3トレンチでもほぼ同じ位置で北壁が同様に垂直気味に掘られた落ち込みが確認されていることから、全体が連続している可能性が考えられる。あるいは、SK140が42-6トレンチ西側の第1期1号トレンチには続いていかないこと、36-3トレンチでは南縁が西に向けて北に弧を描き、立ち上がりの様子を見せることから、東西に長い大型土坑が



第41図 南辺部全体図

途切れ途切れに複数連なるように掘られた可能性も考えられる。この土坑の性格については、築垣と並行するように外側に掘られていることから、築垣を造成するための土採り穴と考えるのが妥当であろう。

SD27・SD29 築垣崩壊後に築垣内側に掘られた溝であり、南大門を挟んで南辺東部をSD27、南辺西部をSD29と呼称している。第2期調査によってSD27の存在が確認され、今回の追加調査によりSD29の存在が新たに判明した。SD27は幅4m程ですり鉢状の断面形状を呈すが、SD29は北縁際に幅1m程で一段深い溝(SD29(深))を掘り、その南側は緩く落ち込む形状となる。今回の追加調査では、第1期27次調査区東部の再調査を行い、「掘り込んで造った築垣」と評価された落ち込みがSD29(深)であることが判明した。これによりSD29(深)は、W44からE13まで57m以上にわたり一直線状に伸びる様相を呈することが確認されたが、第1期9号トレンチでの溝の位置に課題が残る。『総括報告書』では、南辺築垣西側は屈曲せず、一直線状に伸びていた可能性を提起したが、これを補強する成果を得られたと評価したい。

変遷とまとめ

第1期 掘立柱塼(SA04)が構築され、外溝(SD01)が伴うと考えられる。SD01が伴うと考える根拠は、SD01南縁が築垣造成のための土採り穴と考えられるSK140に壊されていることによる。これにより、SD01は築垣造成以前に存在するものであり、SA04に伴うものと判断できる。これに基づけば、SD01が埋まる以前にSK139の人為的埋土が行われていなければならないため、SA04構築に際してSK139の該当部分を埋めたと判断することができる。SA04については、『総括報告書』において伽藍地を区画する最初期の施設として周回すると考えた。しかし、東辺部の調査において柱穴を検出することはできず、東辺での掘立柱塼の存在を想定するのが難しくなった。そのため掘立柱塼(SA04)は、南辺のみに設置された南面景観を重視した仮設的な構築物であった可能性が考えられる。

第2期 掘立柱塼(SA04)を解体し、新たに築垣を造成する。時期は、SA04-P4の柱抜き穴から8世紀第3四半期の土師器製の破片が出土していることから、この頃と判断される。SK140が築垣を造成するための土採り穴と考えられることから、国分寺当時、築垣の南面は大穴がところどころに開いている景観であったであろう。

第3期 築垣崩壊後に、築垣内側にSD27及びSD29が掘削される。『総括報告書』では、SD27を掘った排土を崩壊した築垣下部に盛り上げ、土塁を形成したと考えた。その根拠は、第1期1号トレンチE56ライン(第39図)のように、版築ではなく厚く盛土している箇所が認められたことによる。E35.7ラインと比べれば対照的であろう。しかし、42-6トレンチのように黄褐色土を選んで積み上げている箇所もあり、盛土が厚いからといって一概に土塁とは判断できない状況になった。ここでは土塁の可能性として、第1期1号トレンチ、第2期40-9トレンチ(第16図)をあげるにとどめておきたい。

最後に、南辺区画施設の大きな課題として、築垣西部が屈曲していたか否かをあけておく。今回の追加調査では、築垣崩壊後の内溝であるSD29が検出され、直線状に伸びる様相を呈していることが確認された。SD29は東部の内溝SD27と同様、築垣と並行するように掘られたと考えられることから、築垣も直線状であった可能性が高いと考えられるが(第41図)、SD29の検出のみで結論付けることはできない。将来的に復元築垣の下層の再調査を行い、第1期の調査成果を再検証する必要がある。

写真図版



1. 史跡上野国分寺跡全景(上空から、上が北)



1. 42-6トレンチ全景(北から)



2. 42-6トレンチ全景(南から)



1. 42-6トレンチ築垣全景(西から)



2. 42-6トレンチ東壁築垣断割り断面(西から)



1. 42-6トレンチSA04柱穴検出状況(南東から)



2. 同上(西上から)



1. 42-6トレンチ築垣とSD27全景(北西から)



2. 42-6トレンチ北裾区SK139全景(南西から)



1. 42-6トレンチSK140全景(北から)



2. 42-6トレンチ築垣断割り断面(北から)



3. 42-6トレンチSD27全景(西から)



4. 42-6トレンチ南半全景(南から)



5. 42-6トレンチ南半As-B混土層直下面全景(北西から)



1. 42-7トレンチ全景(南から)



2. 同上(南西から)



1. 42-7トレンチ築垣全景(西から)



2. 42-7トレンチ築垣と造成土全景(西から)



1. 42-7トレンチ暗渠全景(東上から)



2. 42-7トレンチ西壁南端断面(東から)



3. 41-1トレンチ全景(東から)



4. 41-1トレンチと復元南辺築垣西側(東から)



5. 41-1トレンチSD29断面(東から)



1. 42-9トレンチ全景(北から)



2. 42-9トレンチ暗渠全景(北東から)



1. 42-9トレンチ全景(南東から)



2. 42-9トレンチSD29(深)全景(西から)



3. 42-9トレンチSD29遺物出土状況(東から)



4. 42-9トレンチ暗渠と復元暗渠(北から)



5. 42-10トレンチ全景(北から)



1. 42-10トレンチSD29(深)検出状況(西から)



2. 42-10トレンチSD29と復元南辺築垣(西から)



3. 41-2中トレンチSD31検出状況(南から)



4. 41-2南トレンチSD31、SK138検出状況(南から)



5. 41-2トレンチSD31全景(南から)



1. 41-2中トレンチSD31、SK138全景(西から)



2. 41-2北トレンチSD31北端部(北から)



3. 41-2北トレンチ全景(東から)



4. 41-3トレンチ全景(西から)



5. 東大門地区調査風景(北から)



1. 42-3トレンチ全景(西から)



2. 42-4トレンチ全景(西から)



3. 42-5北トレンチSK141全景(西から)



4. 42-5北トレンチSK141断面(北から)



5. 42-5南トレンチ全景(西から)



6. 42-1トレンチ全景(東から)



7. 42-1トレンチSD33全景(南西から)



8. 42-2トレンチ全景(北西から)





11



12



13



14



16



15



17



18



19



20



21



22



24



23



25



26



27



28



29



30



31



32





33



34



35







報告書抄録

書名ふりがな	しせきこうづけこくぶんじあとだい2きついかちょうさほうこくしょ
書名	史跡上野国分寺跡第2期追加調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	橋本淳
編集機関	群馬県地域創生部文化財保護課
所在地	〒371-8570 群馬県前橋市大手町一丁目1番1号 TEL 027-223-1111
発行年月日	2021年1月29日
遺跡名ふりがな	こうづけこくぶんじあと
遺跡名	上野国分寺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしひがしこくぶまち・ひきままち、まえばししもとそうじゃまち
遺跡所在地	群馬県高崎市東国分町・引間町、前橋市元総社町
市町村コード	10202/10201
遺跡番号	01788
北緯	36°39'45"
東経	139°2'22"
発掘期間	20180506-20180630/20190508-20190925
発掘面積	88/308
発掘原因	保存目的調査
種別	社寺
主な時代	奈良・平安時代
主な遺構	伽藍地南辺区画施設、土採り穴
特記事項	南辺築垣の構造、南辺区画施設の変遷について再確認。
要約	史跡上野国分寺跡では、第2期整備事業に伴い、平成24～28年度の5か年にわたる発掘調査を実施した。この調査では、これまで不明であった中門と回廊をはじめ確認したほか、100年近くにわたって金堂とされてきた建物跡の前面で本来の金堂を発見するなど、上野国分寺の姿を大きく塗り替える成果をあげた。この調査成果については、『史跡上野国分寺跡第2期発掘調査報告書—総括編—』として既に報告済みであるが、その後、平成30、令和元年度とさらに追加調査を行い、伽藍地南辺部において新たな知見を得ることとなった。

史跡上野国分寺跡第2期追加調査報告書

令和3(2021)年1月15日 印刷

令和3(2021)年1月29日 発行

編集・発行／群馬県地域創生部文化財保護課

〒371-8570 群馬県前橋市大手町一丁目1番1号

電話(027)223-1111(代表)

ホームページアドレス <http://www.pref.gunma.jp/>

印刷／ジャーナル印刷株式会社
